

大阪狭山市文化財報告書 7

池尻新池南窯発掘調査報告書
— 陶邑窯跡群の調査 —

1992.3

大阪狭山市教育委員会

池尻新池南窯発掘調査報告書

—陶邑窯跡群の調査—

1992.3

大阪狭山市教育委員会

はじめに

本報告書は、大阪狭山市西端の池尻新池の岸に所在する須恵器窯跡の発掘調査報告書です。

池尻新池は、堤体護岸のために西岸にコンクリート擁壁を施すこととなりましたが、それに先立って実施された発掘調査によって、須恵器窯と多くの遺物を発見することができました。本市には多くの須恵器窯がありますが、先に発掘調査を行った、太満池南窯・北窯、狭山池2号窯・3号窯などに加えて、今回の発掘成果は貴重なものとなりました。その成果を公表させていただくことが、本市の文化財の普及、啓蒙の一助になればと、このたび報告書を刊行いたしました。調査にあたりましてご指導、ご協力いただきました各位には心からお礼申し上げます。

本市教育委員会としましては、今後も文化財の調査、保存、活用に努力する所存であります。皆様方の温かいご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成4年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 上谷三郎

例　　言

1. 本書は、大阪狭山市教育委員会が、大阪狭山市狭山五丁目2060-15先所在の池尻新池において実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成元年の10月から12月まで行い、その後、整理作業を平成4年3月まで実施した。
3. 発掘調査は大阪狭山市教育委員会社会教育課の市川秀之が担当し、整理作業については市川および社会教育課の植田隆司が担当した。本報告書の編集は市川と植田が行い、執筆は本文目次に記すとおり、分担してこれを行った。
出土遺物の写真撮影は、阿南写真工房に委託した。
4. 調査にあたっては次のかたがたの参加を得た。
若宮美佐、安有美子、吉本和美、井上昌代、鬼塚理子、川口真之、津野忠之、山崎和子、 笹岡裕里子、大塚貴幸、橋本幸男、井上恭輔、ルイス マウリシオ タム コンタレラス、桜渕繁太郎、井穴俊一、高林正男、松川友和、溝端竹一。
なお、調査における貴重なご指導ご助言を、中村浩氏（大谷女子大学助教授）、小林義孝氏（大阪府教育委員会技師）から頂戴した。厚くお礼申し上げます。

本文目次

はじめに

例　　言

1. 発掘調査に至る経過	(市川)	1
2. 位置と環境	(市川)	1
3. 遺　　構	(市川)	4
4. 池尻新池南窯出土遺物	(植田)	7
5. 池尻新池南窯出土須恵器の基準資料との比較	(植田)	30

挿図目次

第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布	2
第2図 調査地位置図	3
第3図 池尻新池南窯灰原平面図	5
第4図 池尻新池南窯灰原出土遺物（1）（上層灰原・中層灰原・下層灰原）	8
第5図 池尻新池南窯灰原出土遺物（2）（下層灰原）	10
第6図 池尻新池南窯灰原出土遺物（3）（下層灰原・下部灰原層）	11
第7図 池尻新池南窯灰原出土遺物（4）（下部灰原層・表面採集）	13
第8図 池尻新池南窯灰原出土遺物（5）（中層灰原・下層灰原）	15
第9図 池尻新池南窯灰原出土遺物（6）（下部灰原層）	16
第10図 池尻新池南窯灰原出土遺物（7）（中層灰原・下部灰原層）	17
第11図 陶邑窯跡群中の杯身のたちあがり・1	32
第12図 陶邑窯跡群中の杯身のたちあがり・2	32
第13図 陶邑窯跡群出土の杯身の法量・1	33
第14図 陶邑窯跡群出土の杯身の法量・2	33

第15図	陶邑窯跡群出土の杯身の法量・3	33
第16図	池尻新池南窯出土の杯身のたちあがり	36
第17図	狹山池3号窯出土の杯身のたちあがり	36
第18図	太満池南窯出土の杯身のたちあがり	37
第19図	太満池北窯燃焼部出土の杯身のたちあがり	37
第20図	池尻新池南窯出土の杯身の法量	38
第21図	狹山池3号窯出土の杯身の法量	38
第22図	太満池南窯出土の杯身の法量	38
第23図	太満池北窯燃焼部出土の杯身の法量	38

表 目 次

第1表	池尻新池南窯上層灰原出土遺物観察表	18
第2表	池尻新池南窯中層灰原出土遺物観察表	18
第3表	池尻新池南窯下層灰原出土遺物観察表	21
第4表	池尻新池南窯下部灰原層出土遺物観察表	25
第5表	池尻新池南窯表面採集遺物観察表	28
第6表	杯身(たちあがり)形態別検出数	29
第7表	大阪狹山市域に所在する各窯跡出土須恵器のロクロ回転方向	29

図 版 目 次

図版1	池尻新池南窯 遺構(1) (a. 全景、b. 調査地とその周辺)
図版2	池尻新池南窯 遺構(2) (a. 灰原土層断面、b. 上層灰原遺物出土状況)
図版3	池尻新池南窯 遺構(3) (a. 中層灰原、b. 中層灰原遺物出土状況)
図版4	池尻新池南窯 遺構(4) (a. 下層灰原遺物出土状況、b. 灰原除去後)
図版5	池尻新池南窯 遺構(5) (a. 調査開始前、b. 調査完了後)
図版6	池尻新池南窯灰原出土遺物(1) (上層灰原・中層灰原・下層灰原)
図版7	池尻新池南窯灰原出土遺物(2) (下層灰原)
図版8	池尻新池南窯灰原出土遺物(3) (下層灰原・下部灰原層)
図版9	池尻新池南窯灰原出土遺物(4) (下部灰原層・トレンチ内)

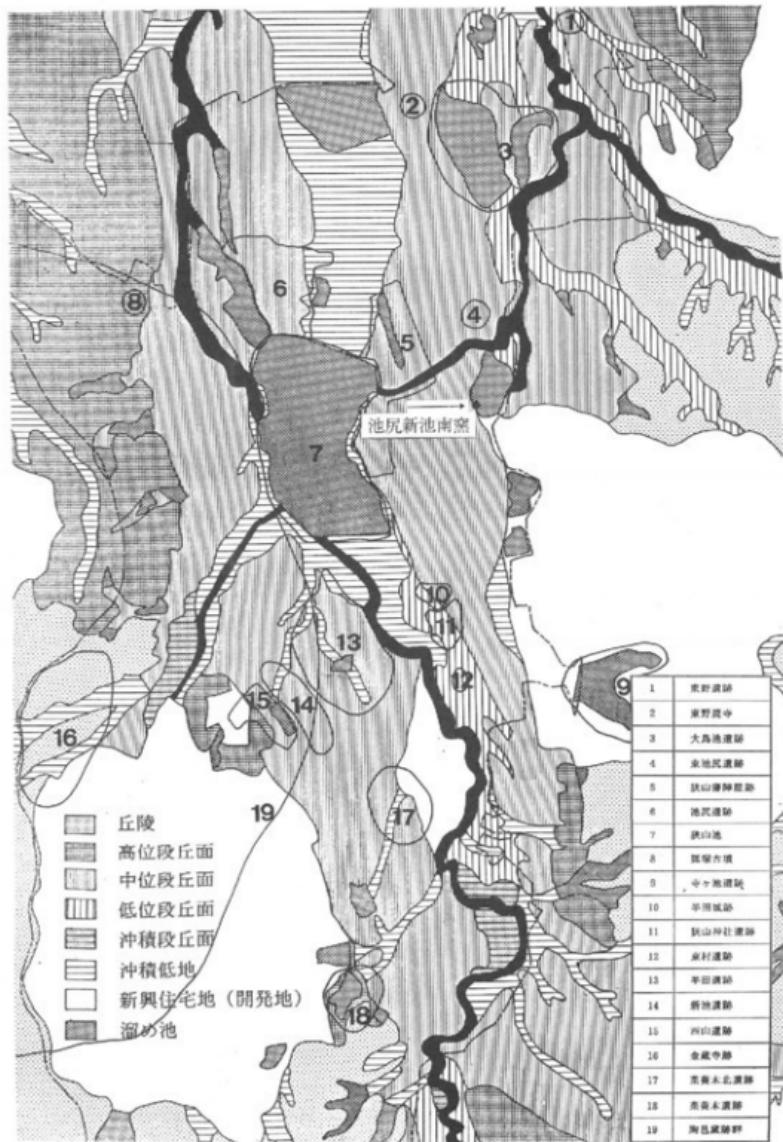
1. 発掘調査に至る経過

大阪狭山市狭山五丁目に所在する農業用溜池、池尻新池の西岸にはかねてより須恵器片の散布する箇所、2地点があることが古くから知られており、大阪狭山市教育委員会ではこれらを埋蔵文化財地図に記載してきたが、これまで本格的な調査は一度も実施されてこなかった。平成元年の秋、大阪狭山市が主体となって西岸の護岸工事が実施されることとなり教育委員会に対して発掘届が提出されたが、この工事は西岸において池水による岸の浸食が著しく、岸あるいは岸に沿って流れる水路が一部くずれかかっていたためこれを補強するための工事であった。教育委員会では現地の踏査を実施した結果、工事予定地の一部において須恵器片が散布していることを確認し、工事によって影響が及ぶ範囲には古墳時代の須恵器窯の灰原ならびに窯本体が存在するとの判断にたって10月15日より発掘調査を開始した。発掘は平成元年11月20日に終了した。発掘調査の結果、結局調査範囲内においては須恵器窯の灰原のみを検出し、窯の本体については調査範囲外に存在したため調査はできなかった。また灰原からはコンテナ100箱を超える遺物が出土し、平成3年度には遺物の整理、報告書の作成を行った。

なお池尻新池には2箇所の須恵器窯が存在するため本書においては今回発掘した窯を池尻新池南窯と表記し、記述をすすめることとしたい。

2・位置と環境

池尻新池南窯が所在する大阪狭山市内の遺跡分布、地形分類は第1図に示した通りである。大阪狭山市内では旧石器時代から縄文時代の遺跡については打製石器が表採されているだけでいまだ発掘調査はなされていない。弥生時代の遺跡としては市南部の高地において後期の集落跡である茱萸木遺跡が知られている。この地に本格的に人々の生活の跡がみられるようになるのは古墳時代に入ってからであり、我国最古の灌漑池といわれる狭山池や、多数の水田が出土した池尻遺跡などが調査されている。また、大阪狭山市の西部に広がる高位段丘には古墳時代中期以降、その段丘崖を利用して多くの須恵器窯が築かれている。この地域の発掘調査は昭和62年に大阪狭山市（当時南河内郡狭山町）教育委員会が実施した山本1号窯の調査のほかは、部分的な調査や分布調査のみでいまだ明らかでない部分も多いが、おおむね5世紀後半から6世紀初めにかけての須恵器窯が優先する地域と考えられる。この地域は堺市南部の泉北丘陵を中心とする陶邑窯跡群の一支群である陶器山支群の一部を構成するものと考えられる。6世紀に入ると須恵器需要の拡大に伴ってか、須恵器窯はさらに低地の開拓谷の斜面や、中位段丘の崖を利用して築かれるようになる。大阪狭山市内に限定するとこの傾向は、須恵器窯の分布の東側への拡大として現われるこ



第1図 大阪狭山市周辺の地形と遺跡分布
(豊田兼典氏原図作成)



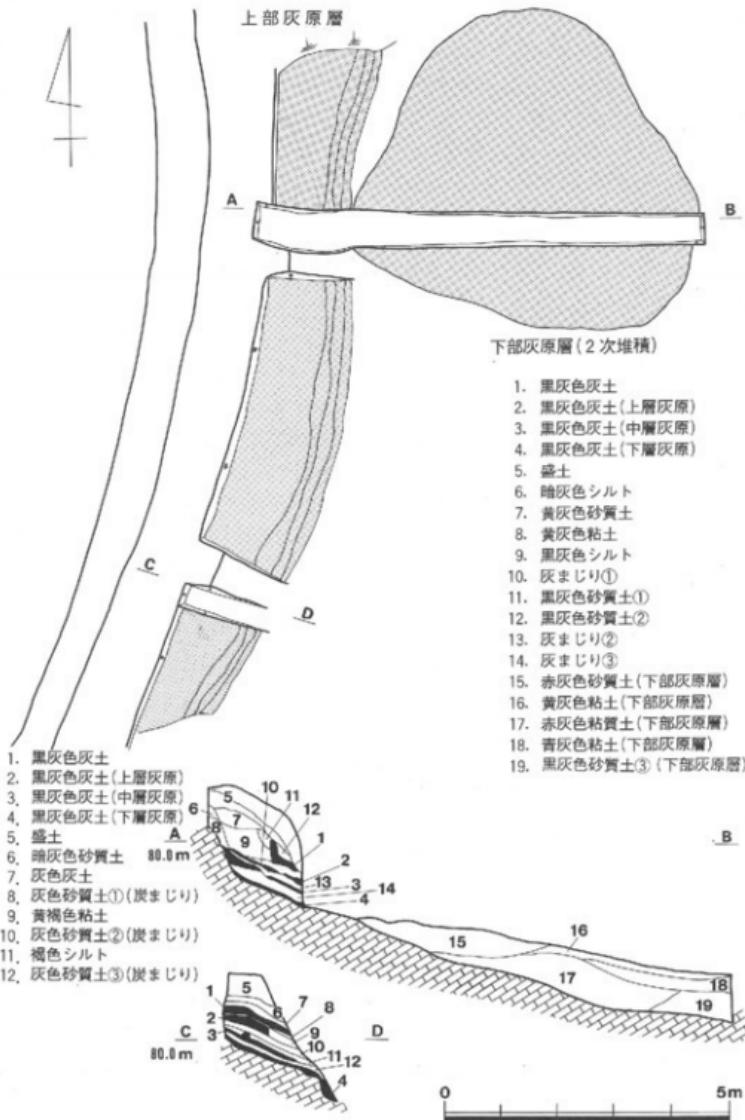
第2図 調査地位置図 (●印は窓跡)

となる。大阪狭山市内には狭山池を構成する西除川（天野川）流域の比較的大きな谷筋と、その東部をながれる東除川流域の小規模な谷筋の2本の南北方向の谷筋があり、これらの谷斜面にも多くの須恵器窯が作られるようになる。今回発掘した池尻南窯はこのうち東除川流域に所在している。これら市内東部の須恵器窯については近年、狭山池ダム化工事に伴うものも含めて、比較的多く調査されるようになってきている。その結果をみると6世紀後半から7世紀の前半にかけてこの地域の須恵器生産はピークをむかえたようである。この時期以後、陶邑窯跡群の消長に軌を一にして、この地域の須恵器生産は下火になっていく。

すでに述べたように、池尻新池南窯は池尻新池という溜池の西岸斜面に所在している。この池は、東除川の流れる谷の西斜面を利用し、東側と北側に堤を築いて作った溜池である。現在の東除川はこの池のさらに東側を流れているが、溜池の築造以前には今の池の場所を河川が流れしており、築造に際して河川を東側に付替えた可能性が強い。池尻新池の築造時期については不明であるが、近世の古文書にはその名をみることができる。大阪狭山市内の他の溜池については、中世後期から近世初期にかけて築造されたものが多く、新池についてもその時期の築造とみることが妥当であろう。この新池築造に際して池尻新池南窯周辺の地形にも大きな改変が加えられた可能性が強い。また池尻新池の南にはひとつ池、すりばち池などの他の溜池が存在し、これらの溜池の水を流す水路が今回発掘した箇所のすぐ西側を通っている。また水路の西側にはコンクリート擁壁がたてられ、その上に住宅が建設されている。これら比較的近年の改変が須恵器窯の窯体、灰原の一部に影響を与えていている。

3. 遺構

池尻新池南窯が築かれた斜面は、調査以前には池の肩から比高差2.2m下まで急に落ちており、それより下については約10°の傾斜で池底に向って落ちていた。斜面には一面に雑草が繁茂しており、また樹木も生えていたため、作業はそれらの伐採、清掃から開始された。地表から約50cmの深さまでは比較的近年のものと思われる盛土で覆われていたため、それを除去したところ黒灰色の灰土層を検出した。ただしこの層には須恵器破片は含まれていなかったため灰原とは考えられず、後世池岸の草焼きなどによって形成された層とみられる。これを除去したところ多くの須恵器片、焼け土、窯壁の一部などをふくむ灰原層があらわされた。この段階で東西方向に2箇所のトレンチを掘り断面を観察したところ灰原は3層に分けられることが明らかとなった。各層の間には灰、炭状の有機物を多く含む砂質土が挟まれており、比較的明瞭に区分することが可能であった。これら3層の灰原を以後、上層灰原、中層灰原、下層灰原と呼ぶこととした。灰原全体の厚さは40cm～



第3図 池尻新池南窓灰原平断面図

50cmであり、各層は約10cm程度の厚さであった。また、今回灰原を検出した範囲は南北12.5m、東西1.7mであったが、この範囲が灰原形成時のものであるとは考えられない。灰原の北端は崖状に崩れており、かってはこれより北まで灰原がひろがっていたことが考えられる。また灰原の東端はほぼ垂直に近い角度で池に落ち込んでいたが、これも池水による浸食によって灰原の東端が削られたために生じたものと考えられる。現在、冬期の池水が抜かれた時期に池の内部を歩いてみると、今回発掘した地点から相当離れた箇所においても須恵器片を散見することができるが、これらは崩壊した灰原に含まれていたものが池水の移動とともに拡散したものであろう。またこれら3層の灰原とはより下部にも多くの須恵器片を含む層が検出された。これは当初形成された灰原が濬め池築造以後、水の浸食を受けて一部が崩壊し、集中的に灰原の直下に堆積した結果生じた2次な堆積であると考えられる。この層を下部灰原層と呼ぶこととしたいが、その範囲は南北5.5m、東西6.2mであった。位置は灰原の北側で層の厚さはもっとも深いところで1mであった。

灰原の南端から北に6mの箇所においては真っ赤に焼けた土が多く観察され、この地点が窯の焚口に近いことが推定された。また灰原をすべて除去したところ、やはりこの箇所では30cm程度地山が掘り下げられており、やはりこの地点のすぐ西に焚口があったことが考えられる。今回の調査範囲においては、須恵器窯の灰原部分のみの検出を果しただけにとどまったが、窯の本体は調査区のすぐ西側を流れる水路や、その上に築かれたコンクリート擁壁の下に存在するものと考えられる。

4. 池尻新池南窯出土遺物

本窯の灰原は上層灰原・中層灰原・下層灰原の3層から形成され、この灰原の一部が二次移動した結果、下部灰原層が、原位置を保つ灰原の斜面下側に堆積する。今回の調査においては、上層灰原・中層灰原・下層灰原、そして二次堆積層である下部灰原層の各層毎に、内包する遺物の検出を行った。今回の調査で出土した須恵器の総量はコンテナ約80箱分である。しかし、発掘調査区外の西側および東側では、灰原と二次堆積層が遺存し、検出しえなかつた資料もまだ多くあるようである。

本報告において図示した須恵器は、比較的の残存状態の良好なもの78点である。個々の資料の詳細については、第1表～第5表の出土遺物観察表に記し、本稿では各灰原層毎にその概ねを記述する。

①上層灰原出土遺物（第4図1～2・図版6-1・第1表）

上層灰原は調査以前からその上面が露出していたため、灰土の厚みは極薄いものであった。また、その上面に散布する遺物は、表面採集すべきものと分別不可能であったため、表面採集遺物として取り上げた。上層灰原の層内から検出した須恵器には細片のものが多く、図示したのは脚付椀1点と短頸壺1点のみである。

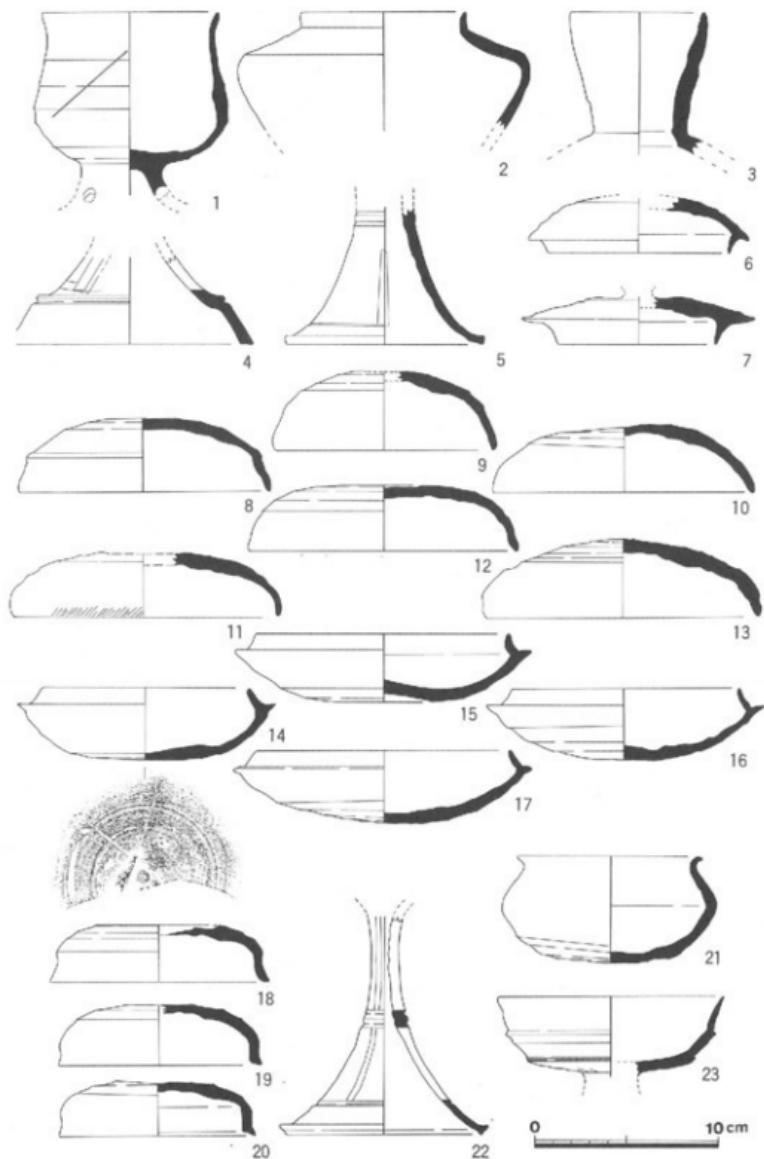
脚付椀は、体部下位で外方にやや張り出して体部は上内方にのび、口縁部で外反して上外方にのびる形態の椀部に、3方向に円孔スカンを有する短い脚部をとりつけるもので、口縁部・体部がほぼ垂直にのびるTK43-I号窯出土の脚付椀¹⁾とは異なった椀部の形態をもつ。体部中位で外方に張り出して口縁部で垂直にのびる静岡県八幡山3号墳出土の脚付椀²⁾とTK43-I号窯のそれとの中間的な形態を(1)の脚付椀は有していると思える。

陶邑窯跡群中においても、脚付椀の検出数はそれほど多くないようであり、本窯の脚付椀は、中層灰原・下層灰原の他の器種の形態から比定しうる型式、およびそれ以後の型式中における一資料として興味深い。

②中層灰原出土遺物（第4図3～17・第8図65～67・第10図68～69・図版6-2～4・第2表）

中層灰原から出土した須恵器の器種には、杯蓋・杯身・提瓶・高杯・壺蓋・甕・器台がある。図示したのは、この内の20点である。

杯蓋は、その口径が最小のもの(9)で12.0cmを、最大のもの(11・13)で15.0cmを測る。その器高は最も低いもの(10)で3.5cmを、最も高いもの(13)で4.3cmを測る。その形態としては、天井部が高く、体部が下外方に下ったのち口縁部が下方に下り、口縁端部を丸くおさめるものが3点ある(8・9・13)。また、天井部が低く平らで、体部・口縁部が下外方に下り、口縁端部を丸くおさめるものが2点あり(10・12)、天井部が低く平らで、体部・



第4図 池尻新池南窯灰原出土遺物（1）
(1・2：上層灰原、3～17：中層灰原、18～23：下層灰原)

口縁部が下方に内彎して下るもの1点ある(11)。

杯身は、口径が最小のもの(14)で11.4cmを、最大のもの(17)で13.8cmを測る。その器高は最小のもの(15)で3.6cmを、最大のもの(16・17)で4.0cmを測る。たちあがりは最低のもの(17)で0.9cmを、最高(16)で1.1cmを測る。たちあがりの形態としては、内傾したの中位で上方にのびるもの1点(15)、内傾したのち端部で上方にのびるもの1点(16)、内傾してのびるもの2点(14・17)がある。

提瓶(3)は、口頸部のみが残存し、口径は7.3cmである。

高杯は、いずれも脚部のみが残存し、脚底径は(4)が13.4cmを、(5)が10.8cmを測る。

壺蓋は、(6)が口径9.8cmを、(7)が口径8.6cmを測る。いずれも天井部中央に扁平なつまみを有するものと思われるが欠損する。(6)については、形態からみると口径の小さな杯身とするのが妥当なように思われるが、杯身と考えた場合、底部中央の円形の欠損状態について説明がつかない。よって、この円形の欠損を、つまみが消失した痕跡であると考え、ここでは壺蓋としておく。

甕は、口径が20.0cm前後のもの(65・66・67)と、口径が42.0cmに達する大型のもの(69)とがある。小型の甕の口頸部は、口縁部で内彎して上方にのびるもの2点(65・67)、口縁部下で垂直に下ったのち内彎してのび口縁部内面に至るもの1点がある。

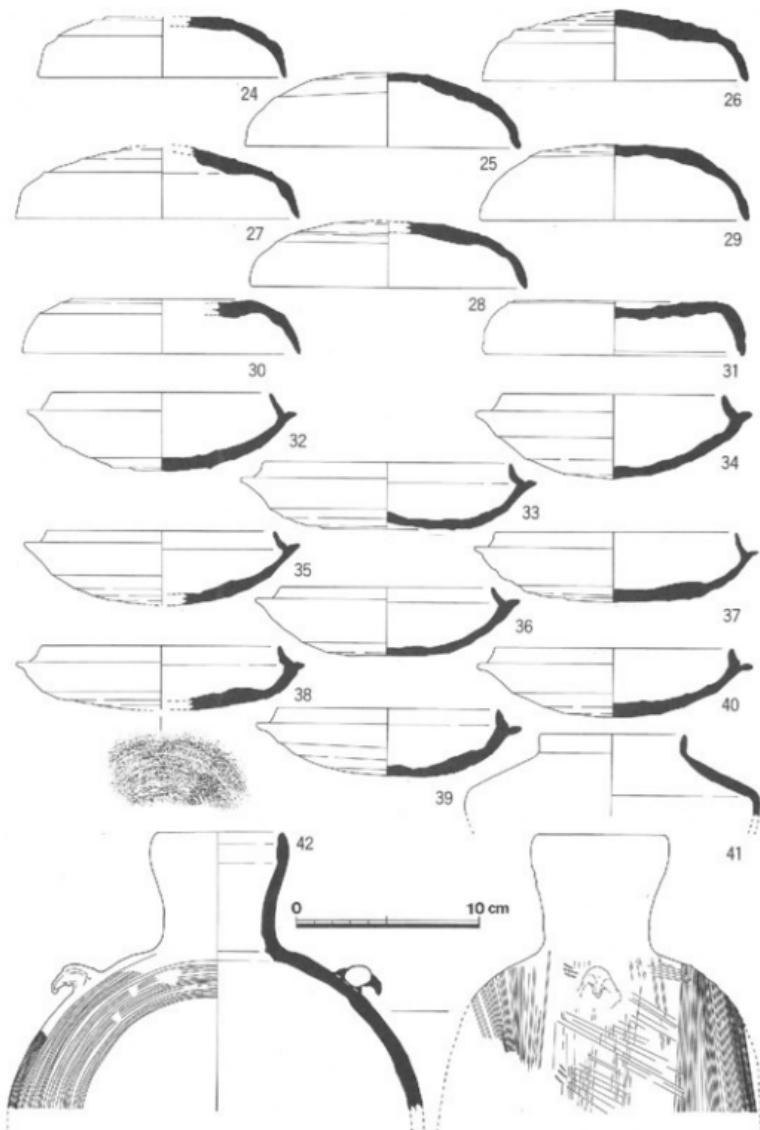
器台は、口径38.3cmを測り、台部のみ残存する。その形態は、体部が内彎して上方にのび、口縁部で外反して上外方にのび外下方にのびるものである。

③下層灰原出土遺物（第4図18～23・第5図24～42・第6図43・第8図70～72・図版6－5～7・図版7－8～15・図版8－16～17・第3表）

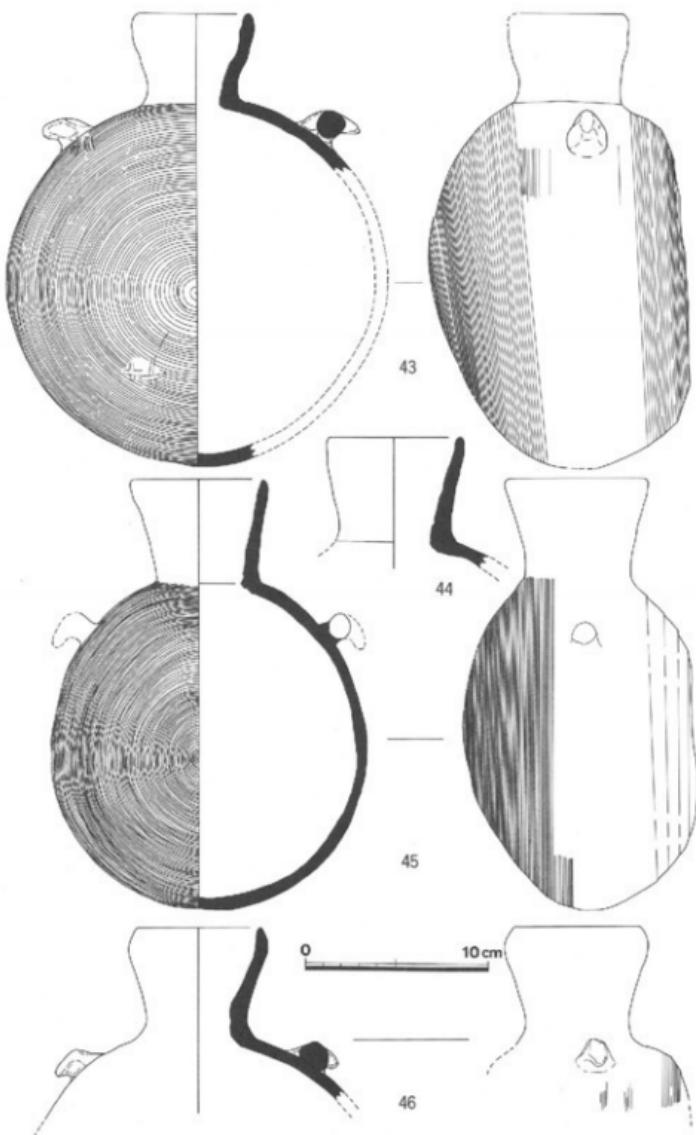
下層灰原から出土した須恵器の器種には、杯蓋・杯身・壺蓋・短頸壺・椀・高杯・提瓶・甕がある。図示したのは、この内の29点である。

杯蓋は、その口径が最小のもの(24)で13.4cmを、最大のもの(30)で15.4cmを測る。その器高は最も低いもの(31)で2.6cmを、最も高いもの(25・29)で4.3cmを測る。その形態としては、天井部がやや高く平らに近く体部・口縁部が下外方に下るもの1点ある(29)。また、天井部が低く平らで体部・口縁部が下外方に下るもの2点あり(24・30)、天井部が低く丸く体部・口縁部が下外方に下るもの3点あり(26・27・28)、天井部が低く平らで体部が下外方に下ったのち口縁部が下方に下るもの1点(31)、天井部が低く丸く体部が下外方に下ったのち口縁部が下方に下るもの1点ある(25)。

杯身は、口径が最小のもの(36)で11.4cmを、最大のもの(33・37)で13.2cmを測る。その器高は最小のもの(33・39)で3.7cmを、最大のもの(34)で4.7cmを測る。たちあがりは最低のもの(36)で0.7cmを、最高のもの(32・37・39)で1.1cmを測る。たちあがりの形態としては、内傾したの中位で直立するもの1点(33)、内傾したの中位で上方にのびるもの3点(37・39・40)、内傾したのち端部で上方にのびるもの2点(36・38)、内傾しての



第5図 池尻新池南窯灰原出土遺物（2）
（下層灰原）



第6図 池尻新池南窯灰原出土遺物（3）
（43：下層灰原、44～46：下部灰原層）

びるもの3点(32・34・35)がある。

壺蓋は、口径が最小のもの(20)で10.8cmを、最大のもの(18)で11.8cmを測る。その器高はいずれも3.0cmを超える。その形態は、3点とも体部は垂直に下り、口縁部は外反し、天井部は低めである。口縁端部の処理において、(18・19)が内傾する平面を成すのに対して(20)は内傾する凹面を成すことでの差異が認められる。

短頸壺(41)は、肩部以上が残存し、口径8.0cm・体部最大径16.1cmを測る。

椀(21)は、口径10.5cm・器高5.7cmを測り、その口縁部は基部から外彎して外方に開く形態である。

高杯は、脚部のみ残存する(22)と、杯部のみ残存する(23)とがある。2段の長方形スカシを有する(22)は、脚部の1/5しか残存しないが、スカシの穿孔方向から3方向のスカシをもつであろうと思われる。脚底径は10.9cmである。(23)の杯部は、口径12.1cmを測る。

提瓶は、(42・43)の2点が出土した。(42)が口径6.9cmを測り、(43)に比してやや太めの口頸部を有する。双方とも肩部に先端がやや扁平な把手を付すが、その先端は(42)が下方へ(43)が外下方へ屈曲する。(42)は肩部・体部の背面の外面で、タタキを施したのちに回転ヘラ削り調整を行い、さらにその後にカキ目調整を施している。

甕は、口径が20.5cmから25.4cmの範囲におさまる3点である。口頸部は、(70・71・72)の3点ともが口縁部で内彎して上方にのびる形態である。

④下部灰原層出土遺物（第6図44～46・第7図47～59・第9図73～77・第10図78・図版8～18・図版9～19～22・第4表）

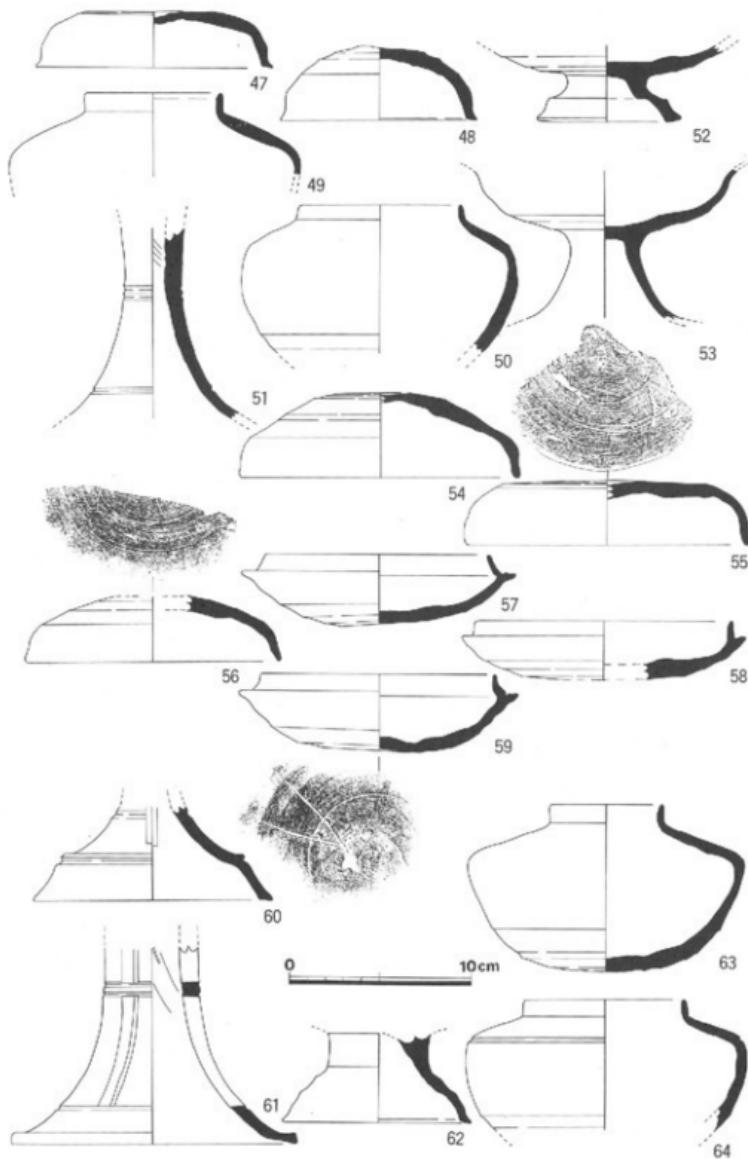
下部灰原層から出土した須恵器の器種には、杯蓋・杯身・提瓶・壺蓋・短頸壺・高杯・甕がある。図示したのは、この内の22点である。

杯蓋は、3点のうち、その口径が小さい方(56)で13.7cmを、大きい方(54・55)で15.4cmを測る。その器高は低いもの(55)で3.5cmを、高いもの(54)で4.6cmを測る。その形態は3点ともが各々異なるものである。

杯身は、口径が最小のもの(57)で12.0cmを、最大のもの(58)で13.9cmを測る。その器高は最小のもの(58)で3.2cm(残存高)を、最大のもの(59)で4.3cmを測る。たちあがりは最低のもの(58)で1.0cmを、最高(57・59)で1.1cmを測る。たちあがりの形態は、直立するもの1点(58)、内傾したのち中位で直立するもの1点(59)、内傾してのびるもの1点(57)である。

提瓶は、3点が出土している。(44)は口頸部のみが残存し、口径は7.0cmを測る。(45)は口径7.2cmを測り、器高は23.2cmを測る。肩部には、その残存状況からみて、下方へ屈曲する把手を付すものと思われる。前面外面にカキ目調整を、背面外面に回転ヘラ削り調整を施す。(46)は口径7.0cmを測り、肩部に先端が丸い下方へ屈曲する把手を付す。

壺蓋は、(47)が口径13.0cm・器高3.1cmを、(48)が口径10.8cm・器高4.0cmを測る。



第7図 池尻新池南窯灰原出土遺物(4)
(47~59:下部灰原層、60~64:表面採集)

口縁端部は(47)がやや内傾する凹面を成し、(48)がやや内傾する平面を成す。

短頸壺は、(49)が肩部以上のみ残存し、口径7.4cm・体部最大径16.0cmを測る。(50)は底部をほぼ欠損し、口径8.8cm・体部最大径15.1cmを測る。

高杯は、脚部の中途部分のみ残存する(51)と、杯部の一部と脚部が残存する(52)と、杯部口縁端部と脚部裾部を欠損する(53)がある。長脚2段の脚部である(51)は、中位に2条と裾部上方に1条のやや鈍い沈線をめぐらす通有のものであるが、全方向においてスカシを有しない。(52)の脚部は、脚底径6.3cmを測る。

甕は、その口径が最小のもの(73)で15.8cmを、最大のもので26.0cmを測る。その口縁部は、口縁部で内彎して上方にのびるもの3点(73・75・78)、口縁部で外下方に短くのびたのち内彎して上方にのびるもの2点(74・76)、口縁部下で外下方に下ったのち内彎してのび、口縁部内面に至るもの1点(77)がある。

⑤表面採集遺物（第7図60～64・第5表）

上層灰原の灰土層上面に散布していた遺物は、上面灰原の灰土層上面から離脱したものと、池の水などによって二次移動したものとの双方を含むものであり、これらを分別して取り上げることは不可能である。このため、これらを一括して表面採集遺物として取り上げた。表面採集遺物には細片のものが多く、図示したのは高杯3点と短頸壺2点のみである。

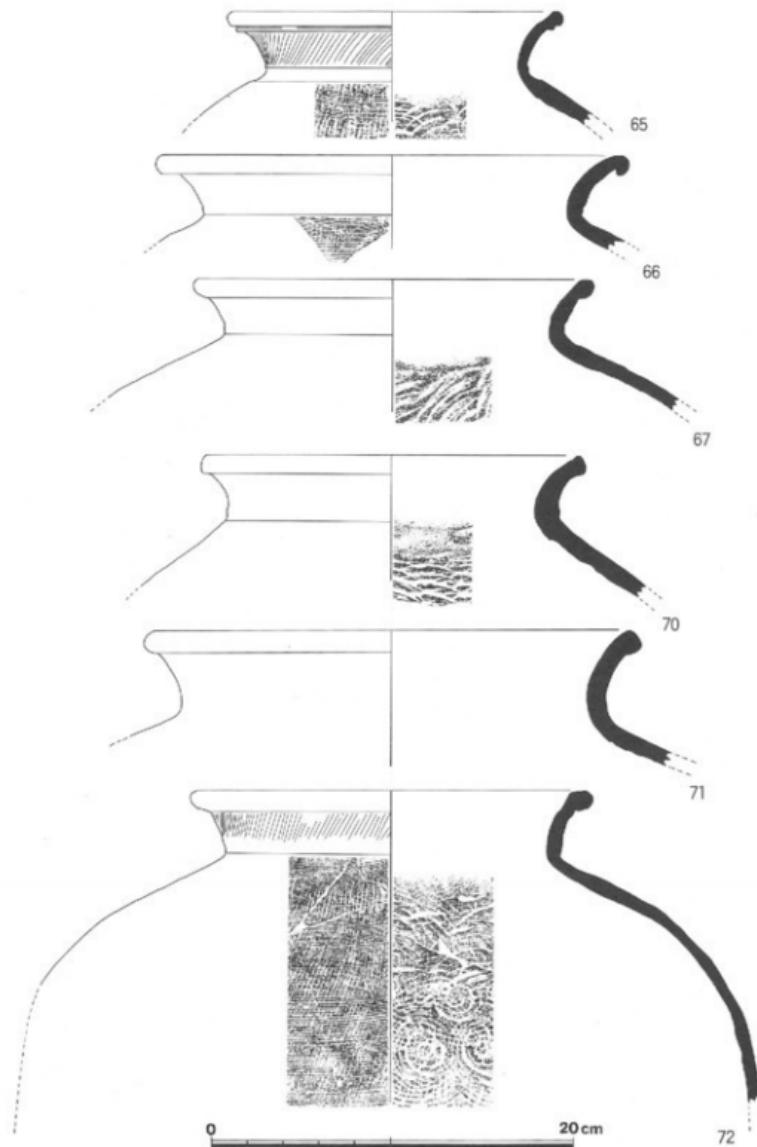
高杯は、3点とも脚部のみ残存する。(60)は脚部の上半部を失するが、中位の非常に鈍い沈線を切って長方形スカシが穿孔されているため、スカシは1段2方向に開くものと思われる。(61)は3方向に長脚2段の長方形スカシを有する脚部であるが、焼き歪みが激しく、残存部位も少ないために図化が困難であったが、図よりももう少し内傾する可能性がある。

短頸壺は、(63)が口径6.0cm・体部最大径15.2cmを測る。(64)は底部を欠損する。口径8.6cm・体部最大径15.2cmを測り、肩部に1条の鈍い沈線をめぐらす。

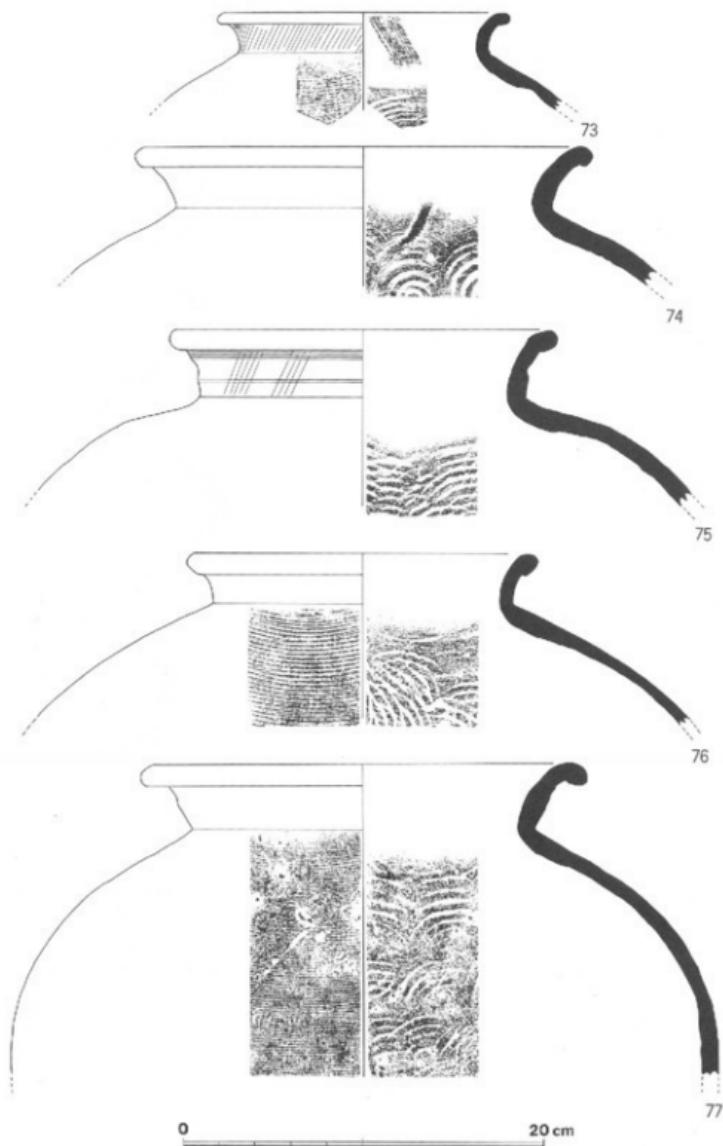
註記

1) 野上丈助「陶邑V」『大阪府文化財調査報告書』第33輯、1982年

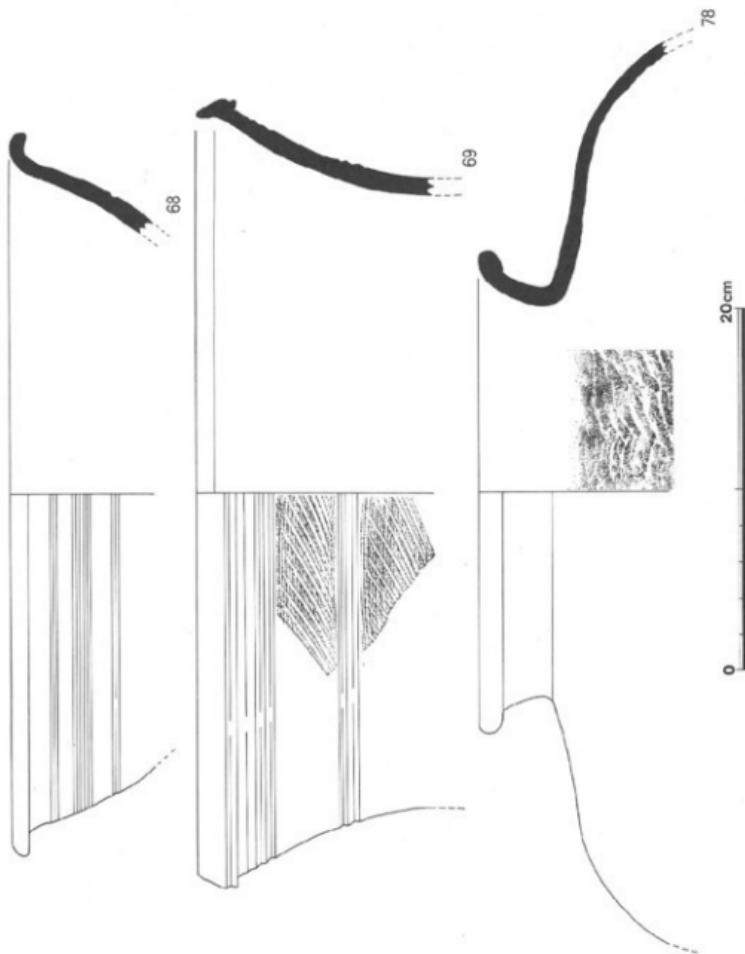
2) 出辺昭三『須恵器大成』1981年



第8図 池尻新池南窯灰原出土遺物（5）
(65~67: 中層灰原、70~72: 下層灰原)



第9図 池尻新池南窯灰原出土遺物（6）
（下部灰原層）



第10圖 池尻新池南塗灰原出土遺物（7）(68・69：中層灰原、78：下部灰原層)

第1表 池尻新池南窯上層灰原出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
脚付碗	4-1	口径 9.8 基部径 5.5 残存高 9.9	体部は外方へやや張り出し、上内方へのび、口縁部は上方方にのび、端部は丸くおさめる。底部はやや浅く平らに近い。洞部は下外方に下ったのち低位で外方に開くものと思われるが、低位以下を欠損する。脚部1/2より下位に3方向の円孔スカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部裏面・体部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：白。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：1/3。 ヘラ記号：体部外面に「/」あり。
	6-1				
短頸甕	4-2	口径 9.0 基部径 9.1 体部最大径 15.9 残存高 6.4	口縁部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下内方に下る。底部は欠損する。体部最大径は上位に位置するものと思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一灰色、外一暗灰色。胎土：白。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/10。体部外面自然釉付着。肩部外面に笠蓋片密着。

第2表 池尻新池南窯中層灰原出土遺物観察表

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
提瓶	4-3	口径 7.3 基部径 5.2 残存高 7.7	口縁部は上方方にのび、口縁部は上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部・体部・底部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰色。 胎土：白。1mmの長石若干含む。焼成：良好。残存：口縁部のみ/5。口縁部外側に笠蓋片・自然釉付着。
高杯脚甕	4-4	脚底径 13.4 残存高 4.8	脚部上方1/2程度欠損。脚部は下外方に開いて下り、肩部上方で段を成して凸部をめぐらし、下外方に下る。端部はほぼ平面を成して垂れ。3方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰褐色。 胎土：白。焼成：良好。残存：脚部の1/4。脚部外側に凹み。反転復元。
同上	4-5	脚底径 10.8 残存高 7.4	脚部上方1/2程度欠損。脚部は下方に下ったのち下外方に開いて下り、肩部は外方に近くのび、端部は外傾する平面を成して接続する。中位に2条、底部上方に1条の範囲で斜めに切られをめぐらす。2段2方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰黄色。 胎土：白。焼成：良好。残存：脚部の1/4。反転復元。
甕蓋	4-6	口径 9.8 残存高 4.0	天井部は外下方に下り、体部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。内面端部に内傾するかえりを有する。かえり端部は接着し、端部はやや段い。破損状況よりみて天井部外面中央に扁平なつまみを付するものと推定されるが、欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部裏面1/2、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰褐色、外一暗灰色。 胎土：白。1mmの長石をわずかに含む。焼成：良好。残存：5/6。
同上	4-7	口径 8.6 残存高 2.6	天井部・体部は外下方に下り、端部は丸くおさめる。内面端部に内傾するかえりを有する。かえり端部は接着し、端部はやや丸くおさめる。天井部外面中央に扁平なつまみを付するが、欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部裏面2/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一暗灰色、外一灰色。 胎土：白。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。天井部外面自然釉付着。
杯蓋	4-8	口径 13.6 器高 4.1	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。天井部はやや高く平らに近い。天井部と体部の境部に非常に高い棱をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部裏面回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：淡灰褐色。 胎土：白。5mmの長石をわずかに含む。2mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/4。反転復元。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯 蓋	4-9	口径 器高	12.0 4.2	体部は下外方に下り、口縁部は内斂して下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部は高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰色。 胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：1/4。反転復元。
同 上	4-10 6-2	口径 器高	14.0 3.5	体部・口縁部は下外方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰褐色。 胎土：密。2mmの長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/2。口縁部外面上に自然釉付着。内面にやや灰黒ぶり。
同 上	4-11	口径 残存高	15.0 3.4	体部・口縁部は内斂して下方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面1/2、回転ヘラ削り調整。口縁部外側、裏め方向の削りもち、回転ナデ調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。 胎土：2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好、堅密。 残存：1/4。反転復元。
同 上	4-12	口径 器高	14.4 3.6	体部は下外方に下り、口縁部はやや外反して下外方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/3。反転復元。
同 上	4-13	口径 器高	15.0 4.3	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外側5/6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰黄色。 胎土：密。 焼成：やや不良。 残存：2/3。一部反転復元。
杯 身	4-14	口径 受部径 器高 たちあがり高	11.4 14.3 3.9 1.0	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部はやや尖る。 底体部はやや浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：地灰色。 胎土：密。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。口縁部外側、受部上面に自然釉付着。底体部外側土唇片付着。 ヘラ記号：底部外間に「×」あり。
同 上	4-15	口径 受部径 器高 たちあがり高	13.6 16.0 3.6 1.0	たちあがりは内傾したのち、中位でやや上方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5/6、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一灰黄色、外一灰褐色。胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：底部外間に「-」がある。
同 上	4-16 6-3	口径 受部径 器高 たちあがり高	12.1 14.9 4.0 1.1	たちあがりは内傾したのち、端部付近で上方にのびる。端部はやや尖る。 受部は外上方にのび、端部はやや尖る。 底体部はやや浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一明灰色、外一灰褐色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。 焼成：良好。残存：9/10。底部外側自然釉付着。受部上面に杯口縁部分培着。
同 上	4-17 6-4	口径 受部径 器高 たちあがり高	13.8 14.1 4.0 0.9	たちあがりは内傾してのび、端部はやや丸くおさめる。 受部は水平に短くのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面6/7、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：ほぼ完形。

器種	図版 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	8-65	口径 17.9 基部径 14.3 残存高 5.6	口頭部はやや外側して上方に開き、口縁部下で鋲い縫をめぐらし、内側して上方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ皮形。 頸部外面、タタキ。 肩部外面、タタキのちカキ目調整。 肩部内面、青面波タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰黄色。 胎土：密。3mm以下の長石を若干含む。焼成：やや不良。残存：口頭部の1/3。一部反転復元。
同上	8-66	口径 24.4 基部径 20.8 残存高 5.1	口頭部は外側して上方に開き、口縁部下で垂直に下ったのち、内側して上方にのびて内方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ皮形。 肩部外面、タタキのちカキ目調整。 肩部内面、不明。 他は回転ナデ調整。	色調：灰色。胎土：密。1mmの長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/6。反転復元。
同上	8-67	口径 20.1 基部径 18.6 残存高 7.1	口頭部は上方にのび、口縁部で内側して上方方にのび、肩部は丸くおさめる。肩部は下方方にやや内側して下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ皮形。 肩部外面、タタキ。 肩部内面、青面波タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内一暗灰色、外一淡灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。焼成：良好。 残存：口頭部の1/5。反転復元。 自然輪付着。
器台台部	10-68	口径 38.3 残存高 7.6	体部は外側して上方方にのび、口縁部は外反して上方方にのびたのち外下方にのびる。肩部は丸くおさめる。底部以下欠損。 体部外面上に1条の沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ皮形。 体部外面下半、タタキ。 体部外面上半、カキ目調整。 他は回転ナデ調整。	色調：明褐色。 胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。焼成：やや不良。 残存：台部の1/12。反転復元。
甕	10-69	口径 42.0 残存高 12.8	口頭部は外反しながら上方にのび、口縁部下で短く外下方にのびたのち上方方にのび、やや内側しながら内側し、肩部附近でやや上方にのび、肩部は丸くおさめる。口縁部下方に2条、颈部中位に2条の沈線をめぐらし、中位の沈線の上下に横推き平行沈線文を有す。	マキアゲ、ミズビキ皮形。 頸部外面、カキ目調整。 他は回転ナデ調整。	色調：内一淡灰色、外一灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/20。反転復元。

第3表

池尻新池南窯下層灰原出土遺物觀察表

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
壺	4-18 蓋	口径 11.8 器高 3.2	体部は垂直に下り、口縁部は外反して下外方に下り、端部はやや内傾する平面を成す。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰色、外一暗灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/4。 反転復元。
同 上	4-19	口径 11.0 器高 3.3	体部は垂直に下り、口縁部は外反し、端部は内傾する平面を成す。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡黄色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：1/5。 反転復元。 天井部外面自然釉付着。
同 上	4-20 7-13	口径 10.8 器高 3.0	体部は垂直に下り、口縁部は外反し、端部は内傾する凹面を成す。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰色、外一暗灰色。 胎土：密。 1mmの長石若干含む。 焼成：良好。 残存：8/9。 天井部外面自然釉付着。 口縁部内面に黒斑柄着。
碗	4-21 7-14	口径 10.5 底径 9.4 体深最大径 11.7 器高 5.7	口縁部は基部から外彎して外方に開き、端部は丸くおさめる。 周部は下外方に強く張り出し、底部は下内方に下る。 底部は平らに近い。 体部最大径は中位に位置する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：褐色。 胎土：密。 2mm以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：5/6。 口縁部外面、体部外面自然釉付着。 内面灰かぶり。
高 杯 脚 部	4-22 7-15	脚底径 10.9 残存高 11.8	脚部は下方に下ったのち、下外方に開いて下り、張出部は外側する凹面を成し、内面に段を成す。 中位に2条、脚部上方に1条の沈線をめぐらす。 2後3前方に方形スカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナガ調整。 脚部内面にしごり目あり。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。 1mmの長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：脚部1/5。 反転復元。 脚部外面自然釉付着。
高 杯 杯 部	4-23	口径 12.1 残存高 4.5	体部はやや外方にのび、口縁部はやや外反して上外方にのびる。 端部はやや丸くおさめる。 底部はやや深くやや丸い。 底部・体部境界にやや鋸い接を、底部3/5上方にやや鈍い接をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面9/10、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰褐色。 胎土：密。 2mmの長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：杯部1/5。 反転復元。 内面自然釉付着。 ヘラ記号：天井部外面に「三」がある。
杯 蓋	5-24	口径 13.4 残存高 3.4	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。 天井部はやや低く平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面9/10、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰色、外一灰青色。 胎土：密。 1mmの長石を含む。 焼成：良好、堅致。 残存：1/2。 反転復元。
同 上	5-25 6-5	口径 14.8 器高 4.3	体部は下外方に下り、口縁部はやや下方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。 胎土：密。 3mm以下の長石を若干含む。 焼成：やや不良。 残存：7/8。 反転復元。
同 上	5-26	口径 14.4 器高 3.8	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや丸くおさめる。 天井部は低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰黄色。 胎土：密。 1~3mm程度の長石を多く含む。 焼成：不良。 残存：1/2。 反転復元。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
杯 蓋	5-27	口径 残存高	14.8 4.0	体部・口縁部は下外方に下り、端部は鋭い。 天井部はやや低く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 5/6、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡黄色。 胎土：白。1mmの長石をわずかに含む。燒成：不良。 残存：1/4。反転復元。
同 上	5-28	口径 残存高	14.6 3.6	体部・口縁部は下外方に下り、端部は丸くおさめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 4/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰青色、外一灰青色。 胎土：白。3mm以下の長石を若干含む。燒成：良好、堅致。 残存：1/3。反転復元。
同 上	5-29 6-6	口径 基高	14.4 4.3	体部は下外方に下り、口縁部はやや下外方に下る。 端部は丸くおさめる。 天井部はやや高く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 3/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：棕色。 胎土：やや密。4mm以下の長石を若干含む。燒成：不良。 残存：4/5。
同 上	5-30	口径 残存高	15.4 2.9	体部・口縁部は下外方に下り、端部はやや鋭い。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 9/10、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰青色、外一淡灰黄色。 胎土：白。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。 残存：1/3。反転復元。
同 上	5-31	口径 基高	14.1 2.6	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。端部は丸くおさめ、内底に非常にあまい段を成す。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面 4/5、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：淡灰青色。 胎土：白。3mm以下の長石を若干含む。燒成：良好、堅致。 残存：1/2。反転復元。
杯 身	5-32	口径 受部径 基高 たちあがり高	11.9 14.8 4.2 1.1	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや低く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面 3/4、回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。胎土：密。1mmの長石を若干含む。2mmの石英をわずかに含む。燒成：良好。 残存：1/2。
同 上	5-33 6-7	口径 受部径 基高 たちあがり高	13.2 15.8 3.7 1.0	たちあがりは内傾したのち中位でほぼ直立する。 端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は低く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：密。2mmの長石をわずかに含む。燒成：良好。 残存：1/2。反転復元。
同 上	5-34 7-8	口径 受部径 基高 たちあがり高	11.8 14.8 4.7 1.0	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は低く、底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。燒成：良好。 残存：2/3。
同 上	5-35	口径 受部径 残存高 たちあがり高	12.2 14.8 4.0 0.8	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は低く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他の回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰色。 胎土：白。1~4mmの長石を若干含む。燒成：良好。 残存：1/3。反転復元。

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯 身	5-36 7-9	口径 11.4 受部径 14.2 器高 3.8 たちあがり高 0.7	たちあがりは内傾したのも端部で上方にのびる。端部は丸くおさめる。 受部はやや上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。 胎土：粘。2mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/3。反転復元。
同 上	5-37 7-10	口径 13.2 受部径 15.6 器高 3.8 たちあがり高 1.1	たちあがりは内傾したのも中位で上方にのび、端部は鋭い。 受部はやや外上方にのび、端部はやや丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面4/5、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰褐色、外一灰褐色。 胎土：粘。1mmの長石を若干含む。施成：良好。残存：4/5。 外面に自然釉付着。
同 上	5-38 7-11	口径 12.8 受部径 15.6 残存高 3.5 たちあがり高 1.0	たちあがりは内傾したのも端部附近で上方にのび 端部は丸くおさめる。 受部は水平に短くのび、端部はやや鋭い。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰青色。胎土：粘。1~3mmの長石若干含む。施成：良好。残存：1/2。反転復元。ヘラ記号：底部外面に「×」がある。
同 上	5-39 7-12	口径 12.1 受部径 14.6 器高 3.7 たちあがり高 1.1	たちあがりは内傾してやや上方にのび端部はやや鋭い。 受部は外上方にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一朝灰青色、外一一期灰褐色。 胎土：粘。1mmの長石を含む。施成：良好。残存：3/4。 外面自然釉付着。
同 上	5-40	口径 12.8 受部径 14.8 器高 3.8 たちあがり高 0.9	たちあがりはやや内傾して上方にのび端部は丸くおさめる。 受部は水平にのび、端部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。 胎土：粘。 施成：良好。残存：2/3。反転復元。
短 頸 壺	5-41	口径 8.0 基部径 8.2 体部最大径 16.1 残存高 4.4	口縁部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。 肩部は外下方に張り出る。 底部・底部は欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一褐色、外一淡褐黄色。 胎土：粘。1~3mmの長石を若干含む。施成：不良。残存：1/8。反転復元。
捷 瓶	5-42 8-17	口径 6.9 高部径 6.4 体部最大径 22.6 残存高 14.9	口縁部は外傾しながら上方にのび、口縁部でやや内側に立ち直し、端部は丸くおさめる。肩部・体部・底部は正面で縦に長い球形を成し、側面でやや角張った椭円形を成すようである。体部下半・底部欠損。肩部に先端がやや扁平な下方へ屈曲する左右二対の把手を付す。把手一方欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部前面外、カキ目調整。肩部・体部背面外、タッキのち回転ヘラ削り調整のちカキ目調整。倒側面4/5、タッキのちカキ目調整。他は回転ナデ調整。肩部・体部内面に多くの接頭痕あり。	ロクロ回転：左方向。 色調：灰青色。 胎土：粘。1mmの長石を若干含む。施成：良好、堅腹。残存：1/3。一部反転復元。
同 上	6-43 8-16	口径 6.0 基部径 5.6 器高 25.0	口縁部はやや外傾しながら上方にのび、口縁部でやや内側に立ち直る。肩部・体部・底部は正面で球形を成す。体部頂面欠損。肩部に先端がやや扁平な、外一下方へ屈曲する左右二対の把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部・底部前面外、同側面1/2、背面外、カキ目調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰褐色、外一灰褐色。胎土：粘。3mm以下の長石を若干含む。施成：良好。残存：1/2。一部反転復元。ヘラ記号：体部前面「×」2箇所あり。肩部・体部前面外自然釉付着。口縁部・肩部・体部外側灰かぶり。口縁部窓空片付着。

器種	図面 図版	法長(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
斐	8-70	口径 20.5 基部径 18.4 残存高 6.8	口頭部は外彫しながら外上方に開き、口縁部で内彫して上内方にのび、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タタキのちカキ目調整。 肩部内面、背面波タタキ。 他は回転ナデ調整。	色調：内一灰色、外一明灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干含む。焼成：良好。堅致。残存：口頭部の1/4。反転復元。肩部外面灰かぶり。口頭部内面自然釉付着。
同 上	8-71	口径 25.4 基部径 22.4 残存高 6.6	口頭部は外彫しながら上外方にのび、口縁部で外上方にのびたのち内彫して上内方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部内面、背面波タタキ。 他は回転ナデ調整。	色調：灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：口頭部の3/4。口頭部外面自然釉付着。
同 上	8-72	口径 22.0 基部径 18.0 残存高 16.7	口頭部は上方にのびたのち上外方にのび、口縁部で外上方にのびたのち、内彫して上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外下方に下って内彫し、体部は内彫しながら下方に下る。体部一部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 強部外張、タタキのち回転ナデ調整。 肩部・体部外面、タタキのちカキ目調整。 肩部・体部内面、同心円タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一灰青色、外一暗灰赤色。 胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。焼成：良好。残存：1/5。

第4表 池尻新池南窯下部灰原層出土遺物観察表

器種	図版 図版	法量(cm)	形 種 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
提 瓶	6-44	口径 7.0 基部径 6.5 残存高 6.5	口縁部は上方にのび、口縁部で上方にのび、端部は丸くおさめる。 肩部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内-灰緑色、外-暗灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：口縁部ほぼ完形。
同 上	6-45 8-18	口径 7.2 基部径 5.7 体部最大径 17.3 器高 23.2	口縁部は上方にのび、口縁部に至り、端部はやや丸くおさめる。肩部・体部・底部は正面で間に長い球形を成し、側面で横円形を成す。肩部に先端が端部下方へ屈曲する左右一对の把手を付するものと思われる。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部・底部前面外側、同側面1/2、カキ目調整。 肩部・体部・底部背面外側、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内-明灰色、外-灰褐色。 胎土：密。1mmの長石を若干含む。 焼成：良好。残存：1/2。一部反転復元。肩部前面・背面から体部前面・背面の外側に自然釉付着。
同 上	6-46	口径 7.0 基部径 5.5 残存高 10.3	口縁部はやや外彎しながら上方にのび、口縁部は内彎しながら上方にのび、端部は丸くおさめる。 体部・底部欠損。肩部に先端が丸い下方へ屈曲する左右一对の把手を付す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部背面外側、同側面1/3、カキ目調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：内-灰色、外-暗灰色。胎土：密。焼成：良好。残存：口縁部の1/2。ヘラ記号：口縁部基部付近背面「八」がある。口縁部外面自然釉付着。肩部前面・背面外側、口縁部内面灰かぶり。
蓋 蓋	7-47	口径 13.0 器高 3.1	体部は下方に下り、口縁部で外反し、端部はやや内傾する四面を成す。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内-淡灰青色、外-一端灰青色。 胎土：密。焼成：良好。堅緻。 残存：1/3。反転復元。
同 上	7-48 9-20	口径 10.8 器高 4.0	体部はやや下方に下り、口縁部で外反し、端部はやや内傾する平面を成す。 天井部は高く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内-灰色、外-暗灰色。胎土：密。1mmの長石若干含む。焼成：良好。残存：1/2。反転復元。
短 頸 壺	7-49	口径 7.4 基部径 7.6 体部最大径 16.0 残存高 4.4	口縁部は基部から直立し、端部は丸くおさめる。 肩部は下方に張り出し、体部は下内方に下る。 体部・底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内-灰青色、外-淡灰色（肩部中位以下-暗灰青色）。 胎土：密。焼成：良好。残存：口縁部・肩部の1/2。反転復元。
同 上	7-50	口径 8.8 基部径 9.3 体部最大径 15.1 残存高 8.0	口縁部は基部から若干内傾して上方にのび、端部は丸くおさめる。 肩部は下方に張り出し、体部は下内方に下る。 底部は底付欠損する。 体部最大径は上位に位置する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：明灰青色、外-暗灰色。 胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。焼成：良好。堅緻。 残存：1/8。反転復元。
高 杯 脚 部	7-51	残存高 10.4	脚部は下方に下ったのち、下外方に開いて下る。 脚部・脚部基部付近から上方は欠損する。 中位に2条、脚部上方に1条のやや長い沈線をめぐらす。	マキアゲ、ミズビキ成形。 回転ナガ調整。 脚部内面にしごり目あり。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰褐色。胎土：密。 焼成：良好。残存：脚部の3/5。脚部外側かぶり。
高 杯	7-52	基部径 4.7 脚部径 6.3 残存高 4.0	杯底部は平らに近い。底部上方以上欠損。脚部は下外方に下ったのち外下方に開き、非常にあまい設を成して下外方に下り、脚部は外傾する平面を成して内側で接続する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外側回転ヘラ削り調整。 他は回転ナガ調整。	ロクロ回転：右方向。色調：灰褐色。胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。焼成：良好。 残存：脚部完形。杯部反転復元。

器種	図版 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考	
高 杯	7-53	基部径 残存高	4.4 8.1	体部は上外方にのび、口縁部は外反して上外方にのびる。口縁部欠損。底部はやや丸い。 脚部は下方に下ったのち、下外方に開いて下る。 基部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面2/3、回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰 色、外一暗灰色。胎土：密。 2mm以下 以下の長石若干含む。 焼成：良好。 残存：1/2。 反転復元。
杯 蓋	7-54 9-19	口径 基高	15.4 4.6	体部は下外方に下り、口縁部はほぼ垂直に下る。 窓部は丸くおさめる。 天井部は高くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：淡灰黄色。胎土：密。 5mm 以下の長石を若干含む。 焼成：不良。 残存：1/2。 反転復元。
同 上	7-55	口径 基高	15.4 3.5	体部は下外方に下り、口縁部は下方に下る。窓部 は丸くおさめる。 天井部は低く平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面3/4、回転ヘラ削 り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：明灰黄色。 胎土：密、燒成：良好。 残存：1/4。 反転復元。ヘラ記号： 天井部外面に「—」がある。
同 上	7-56	口径 残存高	13.7 3.5	体部・口縁部は下外方に下り、窓部はやや丸くお さめる。 天井部は低くやや丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面9/10、回転ヘラ削 り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：内一暗 黃色、外一暗青色。胎土：密。 2mm以下 以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：2/3。 反転復元。 ヘラ記号：天井部外面にある。
杯 身	7-57 9-21	口径 受部径 基高 たちあがり高	12.0 14.8 4.0 1.1	たちあがりは内傾してのび端部は丸くおさめる。 受部はやや外上方にのび、窓部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5/6、回転ヘラ削り 調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰青色。 胎土：密。2mm以下の長石を若干 含む。焼成：食肝、堅織。 残存：1/2。 反転復元。
同 上	7-58	口径 受部径 残存高 たちあがり高	13.9 19.5 3.2 1.0	たちあがりは直立し、窓部はやや丸くおさめる。 受部は上外方にのび、窓部は丸くおさめる。 底体部は浅く、底部はほぼ平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：暗灰色。 胎土：密。焼成：良好。 残存：1/2。 反転復元。 口縁部外面・受部上面自然釉付着。
同 上	7-59 9-22	口径 受部径 基高 たちあがり高	12.6 15.3 4.3 1.1	たちあがりは内傾したのち、中位ではほぼ直立し、 窓部は丸くおさめる。 受部は外上方にのび、窓部は丸くおさめる。 底体部はやや深く、底部は平ら。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面5/6、回転ヘラ削り 調整。 他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：灰 色。胎土：密。3mm以下 以下の長石を若干含む。 焼成：良好。残存：2/3。 ヘラ記号：底部外面に「X」あり。
甕	9-73	口径 基部径 残存高	15.8 14.0 5.3	口縁部は外輪しながら上外方にのび、口縁部で外 方にのびたのちや内輪して上方にのび、窓部は 丸くおさめる。肩部は下外方に下る。肩部一部・ 体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 脇部外面、タッキのち回転ナダ 調整。脇部外面、タッキのちカ キ目調整。肩部内面、青海波タ ッキ。他は回転ナダ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰青色、外一暗青色。 胎土：密。1~4mmの長石を多く 含む。焼成：良好。残存：口縁部の 1/6。 反転復元。ヘラ記号：口縁 部内面に「\」がある。
同 上	9-74	口径 基部径 残存高	24.2 20.8 7.5	口縁部は外輪しながら上外方にのび、口縁部で外 下方に屈くのびたのち上外方にのび、内輪して上 内方にのび、口縁部内面に至る。肩部は外下方に 内輪して下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タッキのちカキ目調 整。肩部内面、同心円タッキ。 他は回転ナダ調整。	色調：内一暗灰色、外一灰色。 胎土：密。1~4mmの長石を若干 含む。焼成：良好。 残存：口縁部の1/6。 反転復元。内外面に自然釉付着。

器種	図版 図版	法縦(cm)	形 縮 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
甌	9-75	口径 20.8 基部径 18.1 残存高 9.4	口頭部は上方にのびたのち外方にのび、口縁部で内彎しながら、外上方にのび上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は内彎しながら、外方に下り外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 頭部外面、タタキのちカキ目調整のち、頭部外面3/4、回転ナデ調整。肩部外面、タタキのちカキ目調整。肩部内面、青海波タタキ。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一端灰褐色、外一灰紫色。 胎土：密。1~3mmの長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/8。反転復元。
同 上	9-76	口径 18.6 基部径 16.6 残存高 8.8	口頭部は外彎して上方方にのび、口縁部で短く外下方にのび、内彎して上方方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は内彎しながら外下方に下る。体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タタキのちカキ目調整。肩部内面、青海波タタキ。 他は回転ナデ調整。	色調：暗灰色。 胎土：密。 焼成：良好。 残存：口頭部の1/2。反転復元。
同 上	9-77	口径 23.4 基部径 19.0 体部最大径 38.6 残存高 16.8	口頭部は外方にのび、口縁部下で外下方に下り、口縁部で内彎しながら、上外方にのび上方にのび、口縁部内面に下る。肩部は内彎しながら外下方に下り、体部は下方に下る。体部下半・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部・体部外面、タタキのちカキ目調整。肩部・体部内面、青海波タタキ。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：左方向。 色調：明灰褐色。胎土：密。1~2mmの長石を含む。 焼成：良好。 残存：1/8。反転復元。肩部外面裏壁片接着。肩部・体部外面・口縁部内面自然釉付着。
同 上	10-78	口径 26.0 基部径 11.5 残存高 10.0	口頭部はやや外彎して上方方にのび、口縁部で内彎して、外上方にのび、上方にのびる。端部は丸くおさめる。肩部は外方に張り出し、内彎して外下方に下る。肩部一部・体部・底部欠損。	マキアゲ、ミズビキ成形。 肩部外面、タタキのちカキ目調整。肩部内面、青海波タタキ。 他は回転ナデ調整。	色調：灰褐色。胎土：密。焼成：良好。残存：口頭部の1/3。反転復元。肩部外面裏壁片接着。口縁部内面・肩部外面灰かぶり。

第5表

池尻新池南窯表面採集遺物観察表

器種	図面 図版	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯脚部	7-60	脚底径 12.6 残存高 4.9	脚部上方 1/2 以上欠損。脚部は下外方に開いて下り、底部上方で段を成して凸部をめぐらし、下外方に下る。底部は内傾する凹面を成して接地。中位は下に 1 条の非常に鋭い沈線をめぐらす。2 方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成型。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一淡灰褐色、外一暗褐色。 胎土：底。3 mm 以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：脚部 1/4 以下。反転復元。
同上	7-61	脚底径 15.4 残存高 10.8	脚部上方 1/2 以下欠損。脚部は下方に下ったのち下外方に開いて下る。底部はやや内傾する凹面を成して接地。中位に 2 条、端部上方に 1 条の鋭い沈線をめぐらす。2 段 3 方向に長方形スカシを有する。	マキアゲ、ミズビキ成型。 回転ナデ調整。 脚部内面にしごり目あり。	ロクロ回転：右方向。 色調：内 淡灰黄色、外一暗灰色。 胎土：底。3 mm 以下の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：脚部の 1/3。反転復元。
同上	7-62	脚底径 10.4 残存高 4.8	脚部は下外方に下ったのち、上方 1/3 で外下方に開き、やや内傾して下外方に下り、底部でやや外反する。端部は内傾する平面部を成して接地。	マキアゲ、ミズビキ成型。 回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：褐色。胎土：底。1~4 mm の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：脚部の 1/2。反転復元。
短頸甕	7-63	口径 6.0 基部径 6.2 体部最大径 15.2 高さ 9.0	口縁部は底部から直立し、底部はやや丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下内方に下る。底部は半らに近い。 体部最大径は上位に位置する。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一灰褐色、外一暗褐色。 胎土：底。1 mm の長石を若干含む。 焼成：良好。 残存：1/3。反転復元。
同上	7-64	口径 8.6 基部径 9.0 体部最大径 15.2 残存高 7.0	口縁部は基部からほぼ直立し、端部は丸くおさめる。肩部は外下方に張り出し、体部は下内方に下る。底部はほぼ欠損。 肩部に 1 条の鋭い沈線をめぐらす。 体部最大径は上位に位置する。	マキアゲ、ミズビキ成型。 底部外面回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転：右方向。 色調：内一明灰青色、外一灰色。 胎土：底。1~2 mm の長石をわずかに含む。 焼成：良好。 残存：1/8。反転復元。

第6表 杯身(たちあがり)形態別検出数

たちあがりの形	池尻新池南窯	狹山池3号窯	狹山池2号窯	太満池南窯	太満池北窯	TK43-I号窯	計
上方にのびる(直立)	1	0	0	3	0	44	48
上方にのびたのち低位で直立	0	0	0	0	0	0	0
上方にのびたのち中位で直立	0	1	0	0	0	7	8
上方にのびたのち端部で直立	0	2	0	0	0	0	2
内傾のち低位で直立	0	0	0	0	1	0	1
内傾のち中位で直立	2	4	1	3	3	0	13
内傾のち端部で直立	0	8	1	1	1	94	105
内傾のち低位で上方にのびる	0	0	0	1	2	0	3
内傾のち中位で上方にのびる	4	4	0	5	10	0	23
内傾のち端部で上方にのびる	3	3	3	10	6	0	25
内傾してのびる	6	7	6	8	13	1299	1339
内彌する	0	2	0	0	3	0	5
計	16	31	11	31	39	1444	1572

第7表 大阪狭山市域に所在する各窯跡出土須恵器のロクロ回転方向

(単位:個体数)

窯名・層名	器種	右方向(時計回り)	左方向(反時計回り)
池尻新池南窯下層灰原	蓋杯	15	2
	蓋杯以外	8	2
池尻新池南窯中層灰原	蓋杯	9	1
	蓋杯以外	6	1
太満池南窯灰原	蓋杯	68	0
	蓋杯以外	24	0
太満池北窯燃焼部第1床面	蓋杯	6	0
太満池北窯燃焼部第2床面	蓋杯	63	0
	蓋杯以外	5	0
狹山池3号窯下層灰原	蓋杯	17	14
	蓋杯以外	15	2
狹山池3号窯上層灰原	蓋杯	3	3
	蓋杯以外	2	0

5. 池尻新池南窯出土須恵器の基準資料との比較

近畿地方の窯跡資料による須恵器編年は、森浩一氏の研究¹⁾の後、田辺昭三氏によってほぼ完成され²⁾、中村浩氏によって発展がなされた³⁾。現在、とくに大阪府下においては田辺編年を用いるか、あるいは中村編年を用いるかは研究者および報告者によって、各々まちまちである。これは、一つの窯から出土した須恵器にみられる個体間の形態的な差異を実態に沿った有り得べき差異として容認するか、理想として焼成床面毎に須恵器の形態差を考え、これに依ったとされる型式学的編年の各段階に時間差を求めるかによって各人が分かれるところである。しかし、各焼成床面出土資料と灰原出土資料のクロスチェックが行われて層序と型式との確認がなされたと思われるが、その全ての資料がどの層に含まれて、その層が編年の何段階に相当するのかを、第三者が検出資料の全てにわたって追認を報告書にて行いえない状況では、床式編年による型式編年を使用し、各段階に時間差を求めるには危険な感を払拭しえない。

大阪狭山市域には約90基の須恵器窯跡が確認されているが、陶器山丘陵および北西の高位段丘以外の地域、主として中位段丘崖に築かれた窯跡で表面採集される須恵器は、田辺編年のTK43型式からTK209型式のものが大半である。過去、大阪狭山市教育委員会が発掘調査を実施した当該地に立地する須恵器窯もこの型式内におさまる資料を出土した。

多くの研究者および報告者は、杯身のたちあがりと法量をもってTK43型式とTK209型式を絶対する⁴⁾。これはそれぞれの型式に、ある概念的な形態を各人が設定しているために可能な作業であろう。しかし、実際にTK43号窯の資料を図面と写真でみると、TK43号窯の資料と知らなければ、TK209型式もしくはII型式5段階と判断しうる資料が多く存在するようである。

ゆえに、標式としてのTK43型式を把握しなおすために、TK43号窯出土の杯身のたちあがりと法量をTK10号窯・TK209号窯出土のそれと具体的に比較する必要がある。その上で、抽象的にしか把握しえなかつた、多く存在するTK43型式・TK209型式併行窯跡の資料を位置づけることも可能となる。

①陶邑窯跡群中の杯身のたちあがりと法量（第11図～第15図）

ここでは、陶邑窯跡群中の窯跡から出土した杯身のたちあがりの角度と高さ、およびその法量を較べてみたい⁵⁾。

第11図以降の杯身のたちあがりの角度とその高さをあらわした図では、縦軸にその高さを、放射状の軸にはたちあがりの内傾角度をおいた。高さの計測方法は、たちあがりと受部との境をなす、たちあがりの基部外側を0cmとし、口縁端部までの鉛直方向の距離をたちあがり高とした。たちあがりの角度は、同じくたちあがりの基部外側を起点とし

て鉛直軸を 0° とし、これから、たちあがりの基部外面側と口縁端部を結んだ直線までの角度を計測し、たちあがり角度とした。なお、1個体において、たちあがり高とたちあがり角度にバラツキがある場合は、その平均値をとった。

第13図以降の杯身の法量を示した図では、縦軸に器高を、横軸に口径をおいた。

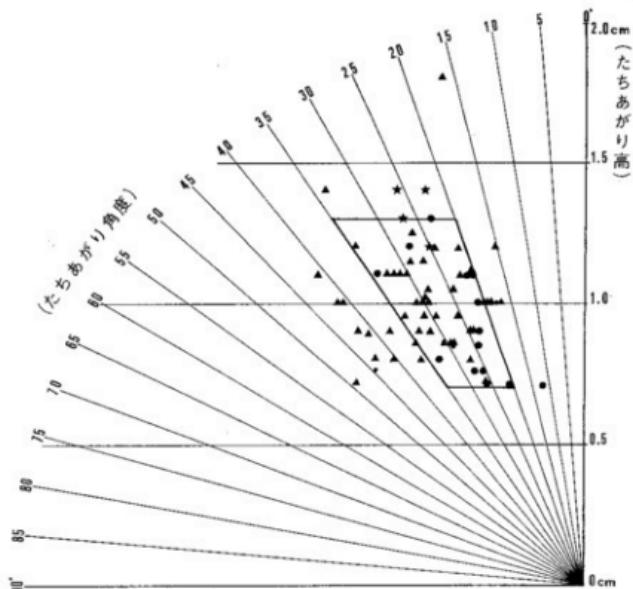
TK10号窯の杯身のたちあがり角度は、 $22^{\circ} \sim 27^{\circ}$ の範囲におさまり、そのたちあがり高は $1.2\text{cm} \sim 1.4\text{cm}$ を測る（第11図）。杯身の器高は $4.4\text{cm} \sim 4.8\text{cm}$ で、口径は $11.8\text{cm} \sim 12.8\text{cm}$ の範囲におさまる（第12図）。TK10号窯の杯身はその点数が少ないと云はえ、たちあがりも法量も非常にまとまった数値を示し、標式として扱い易い資料であることが、今更ながらにわかる。

TK43号窯の杯身のたちあがり角度は、 $20^{\circ} \sim 35^{\circ}$ の範囲に多く集中する傾向が観られるが、たちあがり高は $0.7\text{cm} \sim 1.3\text{cm}$ に広く分布する（第11図）。たちあがり角度においてはTK10号窯のそれよりも 8° は内傾の度合いを強め、たちあがり高はTK10号窯のそれよりも 5mm 低いもののが存在する。たちあがり角度は主として内方へ、たちあがり高は下方へその分布範囲を拡大したことが、TK10型式とTK43型式のたちあがりの明確な差異として、我々に意識される要因である。なお第11図中のたちあがり高の軸の 0.7cm と 13.0cm のラインと、たちあがり角度の 20° と 35° のラインは、それぞれTK43号窯の資料が集中する範囲の限界を示す。TK43号窯の杯身の器高は $3.0\text{cm} \sim 4.6\text{cm}$ の範囲に、その口径は $11.3\text{cm} \sim 16.0\text{cm}$ の範囲にあり、器高の縮小化と口径の拡大化の兆候が認められる（第13図）。 16.0cm にまで拡大する口径を有するものが1点のみみられるが、TK43型式として我々が認知しうる法量の範囲は、器高 $3.4\text{cm} \cdot$ 口径 11.3cm 、器高 $3.0\text{cm} \cdot$ 口径 13.4cm 、器高 $4.6\text{cm} \cdot$ 口径 14.2cm 、器高 $4.6\text{cm} \cdot$ 口径 13.2cm のドットを結んだ偏橢円形のラインの内側にある集中範囲であり、口径が 16.0cm にまで拡大した杯身は、おそらくTK209型式として認知されてしまう資料であろう。

TK10型式とTK43型式の移行期、もしくはその双方にまたがる資料を含むと考えられているMT85号窯出土の須恵器であるが⁶⁾、第11図・第13図のような状況を示している。法量においては、TK10号窯とTK43号窯の両方の分布域におさまるものと分布域を外れるものとがある。たちあがりにおいては、TK43号窯の分布域におさまるものも多いが、TK10号窯資料のたちあがり高をはるかに上まわるもの、たちあがり角度が 40° を超えるものをみることができる。MT85号窯はI期の須恵器も生産しており、ある程度の生産停止期間のうちTK10型式併行期に生産を開始したようであるが、法量とたちあがりからみて、TK43号窯の資料と近似するものと、TK43型式よりも後出する要素を含む資料を有しており、窯の操業期間はTK209型式併行期にまでわたる長期間であったと考えられる。

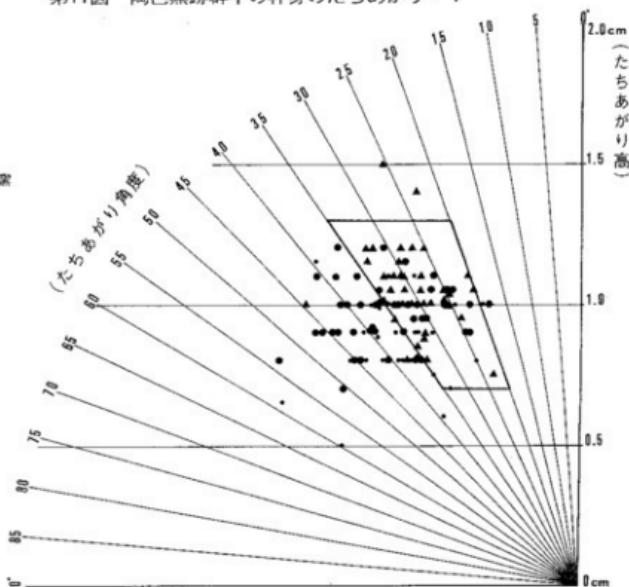
TK209号窯の資料は3点しか示し得ないため、その詳細を知ることはできないが、たちあがり高はTK43号窯のものと同様かもしくはそれよりも低いものと考えられ、たちあがり角度はTK43号窯のものと同様かもしくはそれよりも内傾度を強めたものと一般的に

- ★ = T K10号窯
- ▲ = M T85号窯
- = T K43号窯
- ◆ = T K209号窯

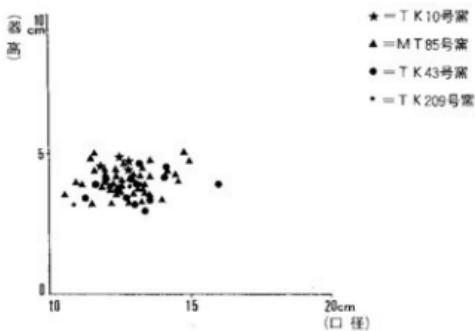


第11図 陶邑窯跡群中の杯身のたちあがり・1

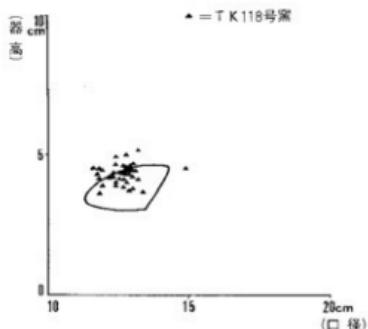
- ▲ = T K118号窯
- = T K312号窯
- ◆ = T K230-II号窯



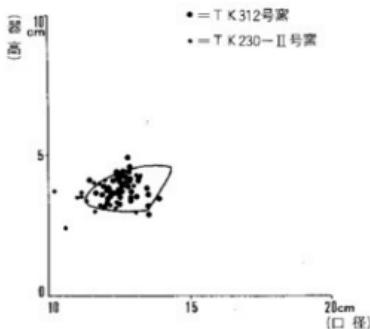
第12図 陶邑窯跡群中の杯身のたちあがり・2



第13図 陶邑窯跡群出土の杯身の法量・1



第14図 陶邑窯跡群出土の杯身の法量・2



第15図 陶邑窯跡群出土の杯身の法量・3

は理解される。実際は、2点がTK43号窯の資料の分布域にはほぼおさまり、1点が0.76cm・44°の数値を示している。この1点が典型的なTK209型式のたちあがりをもつ杯身として理解しうる。法量は、TK43号窯のものよりも、口径においては縮小化と拡大化がなされ、器高はそれと同じかもしくはそれよりも低くなるものと解される。しかし、TK209号窯出土の杯身の法量は、1点のみがやや縮小した数値を示すが、他の2点はTK43号窯のそれの分布域におさまるものである。

つぎに、陶邑窯跡群の中で、TK43型式期およびTK209型式期に操業したと考えられる窯跡の資料をみてみたい。

TK118号窯の窯体内および灰原から出土した杯身のたちあがり角度は、2点を除いて20°～35°の範囲に極度に集中している。たちあがり高もほぼTK43号窯資料の分布域におさまり、本窯の杯身は、そのたちあがりが角度と高さにおいてTK43号窯資料と近似したものであるといえる（第12図）。その法量は、TK43号窯資料の分布域を示す、偏梢円形ラインの内側と、それより高いTK10号窯資料の分布域とに集中する（第14図）。またTK43号窯資料にみられた3.0cm程度のものはなく、それらに比して器高は全体に高めといえる。1点のみは器高4.5cm・口径15.0cmを測り、TK43号窯資料にも存在した口径の拡大した杯身は少数ながらも、本窯においても生産されていたのである。

本窯の杯身はたちあがりと法量において典型的なTK43型式の杯身といえる。しかし、たちあがりの角度が44°に達するものも1点のみあり、こういった資料を層序で分けえない以上、同一の操業期間中に生産されたものと理解するべきであろうし、少数このような資料を含みうるのがTK43型式期の窯の実際の在り方といえよう。

TK312号窯出土の杯身のたちあがりは、その半数が角度と高さにおいてTK43号窯資料の分布域におさまるが、残りの半数の資料は、その角度が35°を超えて内傾し、最大で53°に至る（第12図）。その法量は、TK43号窯資料の分布域である偏梢円形ラインの内側にはほぼおさまる（第15図）。本窯の杯身は、その法量に縮小化の傾向が認められないことと、そのたちあがりは半数がTK43号窯資料の分布域におさまり、比較的高いたちあがりが多いことから、TK43型式に比定しうるものも含むと考えられるが、半数が35°を超える内傾度を示すたちあがりをもつため、それらはTK209型式に含まれるであろう。よって、本窯の資料はTK209型式期を主体としたTK43型式～TK209型式の移行期の資料とするべきであろう。

TK230-II号窯の焼成部および灰原から出土した杯身のたちあがりは、その半数以上の資料がTK43号窯資料の分布域外にあって35°以上の内傾を示し、最も内傾するもので59°に至る（第12図）。その法量は、TK43号窯資料の分布域である偏梢円形ラインの内側にはほぼおさまるが、それらの他に口径が縮小化したものがあり、器高2.4cm・口径10.6cmのもの、器高4.7cm・口径10.2cmのものが存在する（第15図）。本窯の焼成部終ベースC層から検出された杯身は、そのたちあがり角度が40°前後である。しかし、その

下層の検出資料にも40°前後の角度をもつたちあがりの杯身は存在し、TK43号窯資料の分布域におさまるたちあがり角度をもつ杯身と、それよりも内傾するたちあがり角度をもつ杯身とが同時に焼成されていたことがわかる。TK209号窯資料はたちあがり高が1.0cm以下で、たちあがり角度はTK43号窯の分布域を含む17°～44°の範囲にわたっていた。TK230-II号窯資料は、たちあがり高が1.15cmに達するものもあるが、それが集中をみせるのは1.0cm以下であり、たちあがり角度は19°～59°の広範囲にわたる。よって、本窯の資料は、TK43型式期の資料が内在する可能性を否定できないものの、ほぼTK209型式期の窯の資料として捉えてよいのではないか。

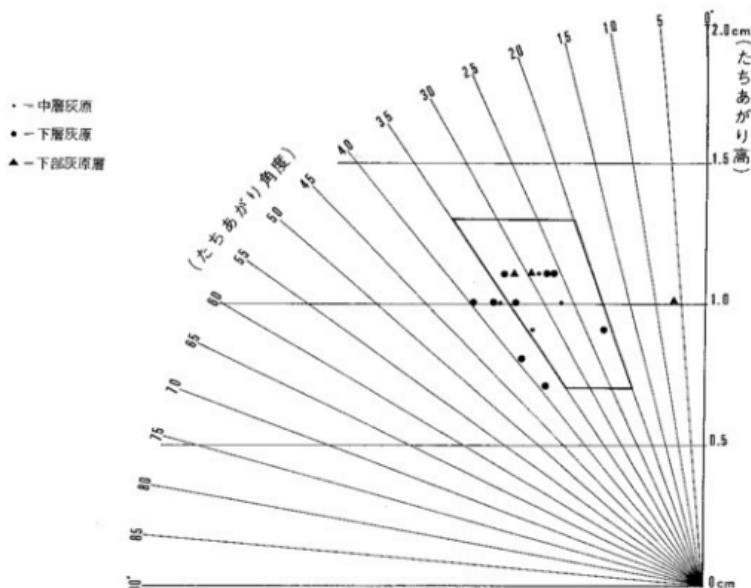
この項においては、TK43型式期の窯としてTK43号窯・TK118号窯を、TK43型式～TK209型式の移行期の窯としてTK312号窯を、TK209型式期の窯としてTK230-II号窯を想定したが、全体の傾向を捉えてその窯の操業期間を各型式の併行期に想定したのであり、各窯の資料の中で層序と型式が対応するならばこの限りではない。

②大阪狭山市域に所在する窯跡の杯身のたちあがりと法量（第16図～第23図）

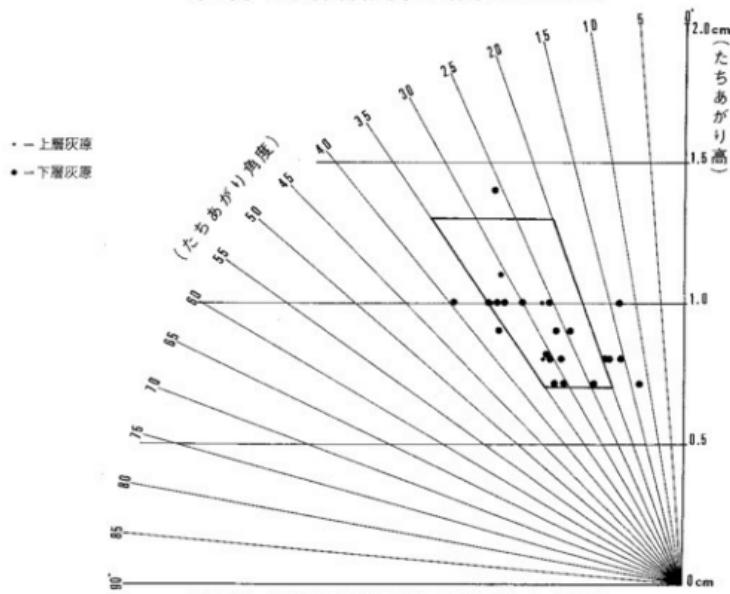
現在も大阪狭山市域のはば全域において、須恵器窯跡の分布をみることができる。大阪府教育委員会の遺跡地図および大阪狭山市教育委員会の埋蔵文化財分布図では、狭山池西岸を南北に延長したラインの西側に位置する丘陵地帯および高位段丘に立地する窯跡のみを陶邑窯跡群中に含めており、本市域東半分に広がる中位段丘に主として立地する窯跡群はその中に含まれていない。しかし、市域の東側にはほとんど須恵器窯跡が確認されていないこと、市域東半分にある窯跡がTK43型式・TK209型式のものに限定されること以外に彼我を分離する要因が存在しないことの2点から、本来は本市域の全ての窯跡を陶邑窯跡群中の窯跡として捉えるべきであると考える。過去、大阪狭山市域にて発掘調査を行ったTK43型式・TK209型式併行期の窯跡の杯身を、同じ陶邑窯跡群のそれと比較し、その中で本報告の池尻新池南窯の資料を評価したい。

池尻新池南窯灰原出土の杯身のたちあがりは、その高さが0.7cm～1.1cmを測る。たちあがり角度は5°～39°であるが、主として21°～39°に集中し、10点がTK43号窯の分布範囲におさまり、5点がそれよりも内傾する（第16図）。杯身の法量は、TK43号窯資料の分布域である偏楕円形ラインにはおさまるもの、器高3.0cm程度のものではなく、全体にやや高めの感がある（第20図）。本窯の資料は、そのたちあがり高に1.2cm以上のものが多く、たちあがりはTK43号窯資料と比較して低めであるといえるが、たちあがり角度は40°以上内傾せず、TK312号窯資料よりも直立の度合いは高い。また、法量においても、縮小化したものはみられない。よって、本窯の資料はTK209型式まで下らず、TK43型式にはほぼ比定しうるものとしたい。

狭山池3号窯⁷⁾灰原出土の杯身のたちあがりは、その高さが0.7cm～1.4cmを測る。た

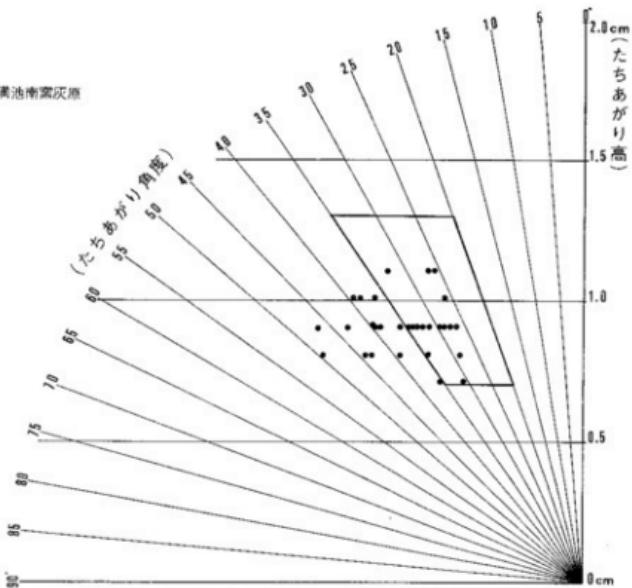


第16図 池尻新池南窯出土の杯身のたちあがり



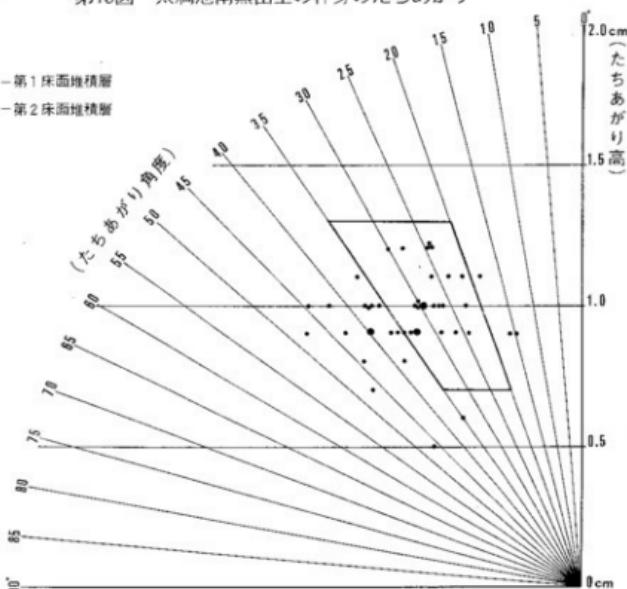
第17図 狹山池3号窯出土の杯身のたちあがり

● - 太満池南窯灰原

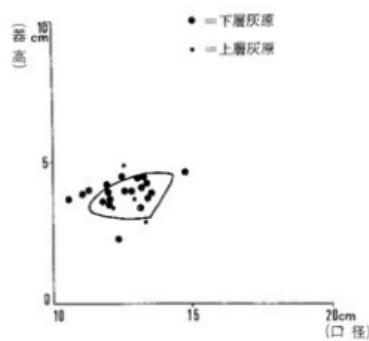


第18図 太満池南窯出土の杯身のたちあがり

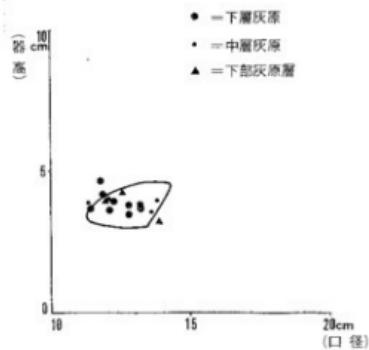
● - 第1床面堆積層
● - 第2床面堆積層



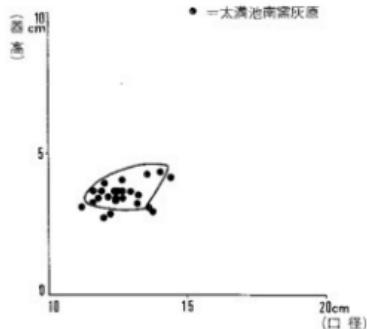
第19図 太満池北窯燃焼部出土の杯身のたちあがり



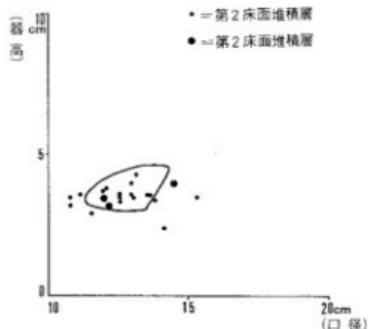
第20図 池尻新池南窯出土の杯身の法量



第21図 狹山池 3号窯出土の杯身の法量



第22図 太満池南窯出土の杯身の法量



第23図 太満池北窯燃焼部出土の杯身の法量

ちあがり角度は 13° ～ 40° を測るが、25点中の18点が 24° ～ 35° におさまる。よって、たちあがりはTK43号窯の分布範囲にその多くがおさまる（第17図）。法量は、TK43号窯資料の分布域である偏橢円形ラインの内側に多くがおさまるもの、器高および口径が縮小化したものが各々1点ずつあることが特徴的である（第21図）。本窯の杯身は、そのたちあがり角度はTK43号窯資料に近い分布を示しているが、たちあがり高が1.0cm以下のものが相対的に多く、法量では縮小化の兆候がみられる。しかしながら、TK312号窯やTK230-I号窯の資料のように 50° 以上内傾するたちあがりをもつ杯身は1点もなく、直立の度合いはそれらよりも高いといえる。また、たちあがり高が相対的に低めであるといえども、1.4cmに達する資料が存在するために1.2cm以上のたちあがり高をもつ杯身がもっと生産されていた可能性は高いといえよう。よって、本窯の資料は、TK43型式に比定しうるものと思われるが、法量の傾向を最大限に評価するならば、TK209型式に下降する資料を含むと考えることも可能である。

太満池南窯¹⁰灰原から出土した杯身のたちあがりはその高さが0.7cm～1.3cmを測り、その最も集中する数値は0.8cm～1.0cmである。たちあがり角度は、 25° ～ 49° を測る。TK43号窯資料の分布範囲に入るのは31点中の17点で、13点はそれ以上の内傾を示す（第18図）。法量は、TK43号窯資料の分布域にはほぼ合致するものであり、特に縮小化したものはみられない（第22図）。本窯の資料は、たちあがり角度とその高さにおいて、池尻新池南窯や狭山池3号窯の資料とは異なった分布を示しており、それはTK312号窯やTK230-I号窯の資料と近似したものである。また、法量においては、TK230-II号窯の資料にみられるような口径が縮小化した杯身は存在しない。このことから、本窯の資料をTK312号窯資料に近しいものと解するならば、本窯は、それと同じくTK43型式～TK209型式の移行期の窯であると考えられる。

太満池北窯¹¹燃焼部から出土した杯身は、そのたちあがり高が0.5cm～1.2cmを測り、そのたちあがり角度は 16° ～ 48° を測る。結果、その半数以上はTK43号窯資料の分布域内にあるが、残りの約半数はそれ以上に内傾しているかもしれない高さが低い（第19図）。法量は、TK43号窯資料の分布域内におさまるものと、口径もしくは器高が縮小するものがある（第23図）。本窯の資料は、太満池南窯のそれと異なり、たちあがり高が0.7cm以下で 45° 以上内傾するものがあり、法量においても太満池南窯資料にはみられない口径もしくは器高が縮小化した例がある。よって、本窯はTK230-II号窯資料と近似した資料を生産した窯であるといえる。燃焼部第1床面堆積層中の資料が少ないと明言はできないが、第1床面堆積層の資料がTK43型式～TK209型式移行期の資料として、第2床面堆積層の資料がTK209型式期の資料として捉えることがほぼ可能であろう。

③まとめ

前項では、TK43型式期の窯として池尻新池南窯・狹山池3号窯を、TK43型式～TK209型式の移行期の窯として太満池南窯と太満池北窯燃焼部第1床面堆積層を、TK209型式期に太満池北窯燃焼部第2床面堆積層を想定した。もし、この順序で操業が行われたのならば、狹山池3号窯－狹山池2号窯－太満池南窯－太満池北窯－東池尻1号窯、池尻新池南窯・ひつ池東窯－大鳥池窯・へど池窯－ひつ池西窯という、TK43型式期からTK217型式期の間における水系ごとの継続的な須恵器窯の操業を捉えることができる。

TK43号窯出土の杯身には明らかに中村編年でII型式4段階とII型式5段階に含まれるものとの両者が存在する。これは、たちあがり角度とたちあがり高および法量がある程度多様であることに起因するのである。よって、TK209型式期の窯跡資料は、TK43号窯的なものを常に内包する可能性が強くなる。しかし、TK209号窯に併行する窯の資料ではそれ以上に多様化が進行しているために、TK43型式期の窯とTK209型式期の窯の産出する杯身の形態および法量における指向性は、やはり双方の間で異なってくるのである。つまり、TK43号窯に併行する窯では、たちあがり角度が $20^{\circ} \sim 35^{\circ}$ を測る法量も同じような杯身を多く生産し、TK209号窯に併行する窯ではさらに多様化が進み、たちあがり角度が $20^{\circ} \sim 50^{\circ}$ 以上とその範囲を広げ、法量においても縮小化するものが含まれるようになる。

このようにTK43号窯資料が退化進行した結果として、その過程の多様な段階の形態をTK209号窯資料は含むため、TK43号窯に併行すると考えられる窯とTK209号窯に併行すると考えられる窯では、数量の多寡は想定されるものの、生産する杯身のなかに、双方間で全く同じ形態で同じ法量をもった杯身を有している。この杯身をTK43型式の中に含めて考えるか、TK209型式の中に含めて考えるかは研究者によって異なるところであろうが、この杯身を含めることによってその型式は存続期間を広げるであろうし、それを含まない型式の存続期間は短いものとなる。

註記

- 1) 森 浩一・石部正志「後期古墳特集」『古代学研究』第30号、1962年
- 2) 田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」『平安学園考古学クラブ研究論集』第10号、1968年
『須恵器大成』1981年
- 3) 中村 浩「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書』第30輯、1978年
『和泉陶邑窯の研究』1981年
- 4) 藤原 学「須恵器の編年1. 近畿A. 獋内」『古墳時代の研究』第6巻、1991年
- 5) 杯身の各数値については次の資料を参照した。

前出註2文献

- 野上丈助「陶邑V」『大阪府文化財調査報告書』第33輯、1982年
井藤 徹「陶邑IV」『大阪府文化財調査報告書』第31輯、1979年
- 6) 前出註2(下)文献
7) 植田隆司「狭山池3号窯発掘調査報告」
『狭山池調査事務所平成3年度調査報告書』1992年
8) 市川秀之・植田隆司「太満池南窯・北窯発掘調査報告書」
『大阪狭山市文化財報告書』5、1991年
9) 前出註8文献

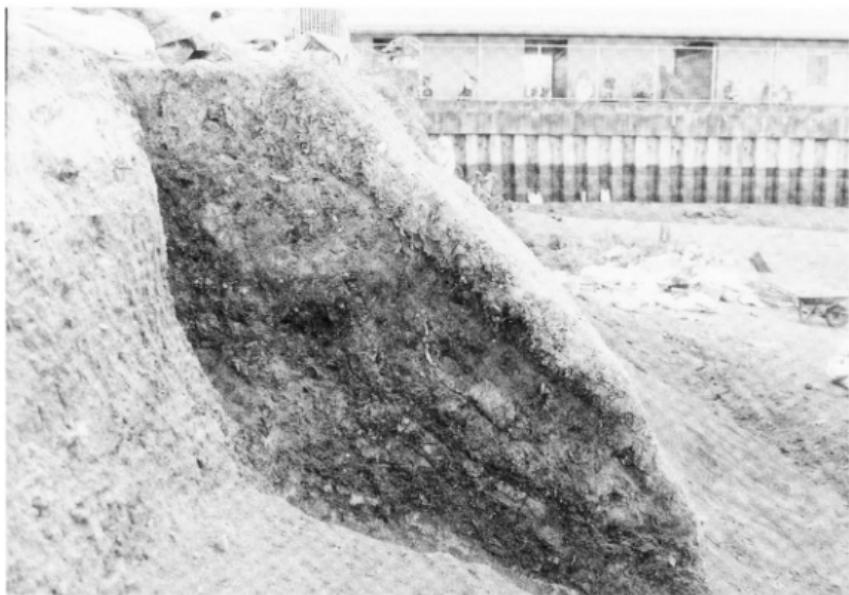
図版



a. 全景(南東から)



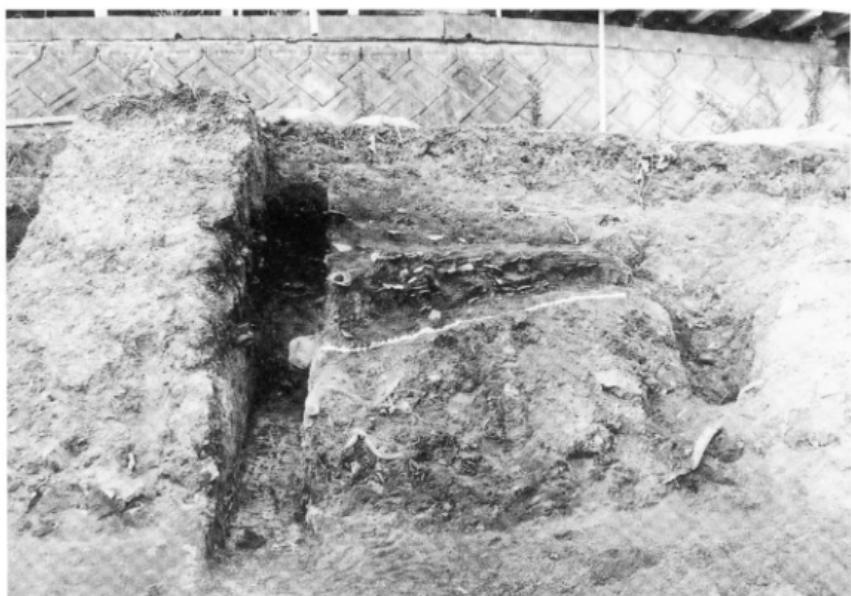
b. 調査地とその周辺(南東から)



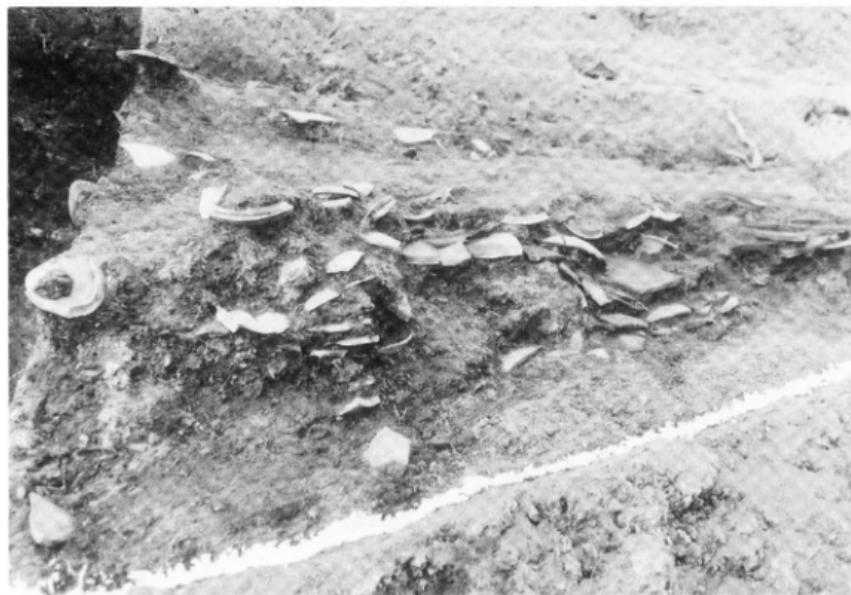
a. 灰原土層断面



b. 上層灰原遺物出土狀況



a. 中層灰原



b. 中層灰原遺物出土狀況



a. 下層灰原遺物出土状況



b. 灰原除去後



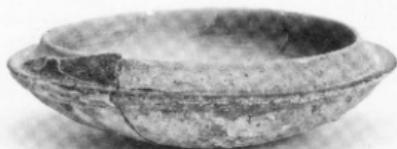
a. 調査開始前



b. 調査完了後(灰原除去後)



1



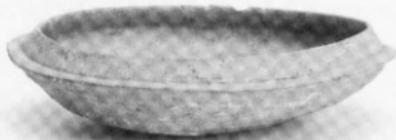
2



3



4



5



6

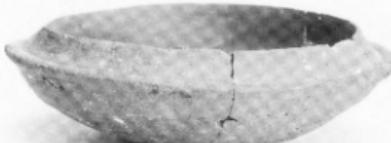


7

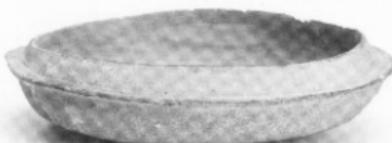
1：上層灰原、2～4：中層灰原、5～7：下層灰原



8



9



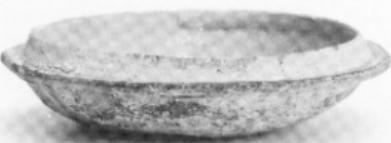
10



11



12



13



14



15

8 ~15 : 下層灰原



16

18



17

16~17：下層灰原、18：下部灰原層



19



20



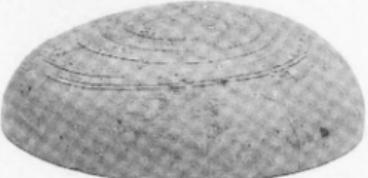
21



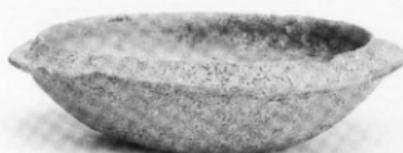
22



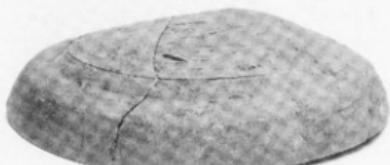
23



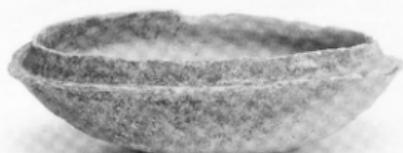
24



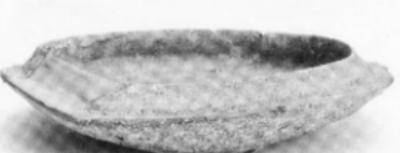
25



26



27



28

19~22: 下部灰原層、23~28: トレンチ内

大阪狭山市文化財報告書 7

**池尻新池南窯発掘調査報告書
—陶邑窯跡群の調査—**

発行日 平成4年3月31日
発 行 大阪狭市教育委員会
印 刷 橋本印刷株式会社
☎ 074548-2305(代)

